家庭雜誌

第五拾三號

負債　借る人となる勿れ貸す人となる勿れ

讀餘雜錄　芳賀逮切

オルレアンの少女　今の時は男子にまれ女子にまれ愛國心の振作を要する時なり

光線の話　光線の反射より生ずる關係種々

嫁形氣　嫁と姑とのなかよきは例すくなき世の數

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

○嬰兒○

は常に肥へ且つ其笑ふ時は必ず醫を顯すものなり瘦瘠たる嬰兒は平常心地善く見へざるが故に甚だ興味の掛きものなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる**スコット乳菓**は至つて服用易きものにして嬰兒には實に無二の好食料なり而して能く其發育の成分を助くるものなり

世界の大醫は此乳菓を最も効驗ありて精氣を増し滋養分ある食料品として諸君に薦めます

虛弱なる母親等には滋養分に富む此乳菓が第一に必要なり一度之を服用せば忽ち健康の身躰となる事疑なし

○賣捌所は全國到る所の藥舖にあれば就て御試用を乞ふ

橫濱廿八番
神戶十七番
米國貿易商會

○咳嗽及風邪○

は病の初候なり次に來るものは肺臟の衰弱にて身躰を憔悴せしめ最後に彼の最恐るべき肺病の萌芽を顯出す彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる**スコット乳菓**は能く咳嗽及風邪を豫防し肺臟を強くし活力を與ふる事實に驚くべし

世界の大醫は此乳菓を最も効驗ありて精氣を増し滋養分ある食料品として諸君に薦めます

此乳菓の洪大なる滋養分は**嬰兒、小兒**及び虛弱なる母親を益すると實に偉にして且彼等は乳菓の滋味を喜ぶものなり

○賣捌所は全國到る所の藥舖にあれば就て御試用を乞ふ

橫濱廿八番
神戶十七番
米國貿易商會

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

十二文豪 第九册

ユーゴー

人見一太郎著

日本膨張の大風雲は戰爭實記の外文學を有する能はざる乎
國光發揚領土擴張は日本文學に何等の音響を與ゆる能はざる乎
威海衛陷落、北洋艦隊全滅を聞き李鴻章來朝、澎湖島占領、媾和成立を聞きつゝ筆を下したる著作は何等風雲の蔭影を止めざる乎
本書は全く風雲動搖の中に產ぜり只その果して風雲見たるに反かざるか否かは天下の公評に一任せん

十二文豪

第一巻	カーライル	定價十八錢	郵稅四錢
第二巻	マコウレー	定價十八錢	郵稅四錢
第三巻	荻生徂徠	定價十八錢	郵稅四錢
第四巻	チルヅチルス	定價十八錢	郵稅四錢
第五巻	ゲーテ	定價十八錢	郵稅四錢
第六巻	エマルソン	定價十八錢	郵稅四錢
第七巻	近松門左衛門	定價十八錢	郵稅四錢
第八巻	新井白石	定價十八錢	郵稅四錢
號外	ジヨンソン	定價二十錢	郵稅四錢

發兌元 民友社
東京々橋區日吉町

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

青年叢書

全部拾卷完結
每月一卷發兌
一册定價拾貳錢
郵税貳錢

身高峰に起つ眼千里の觀なからんや。新勝は國運を急變し而して國勢の進轉は國民の資格と伴はざるべからず。國民の資格を高くするの道果して如何、連勝國は大陸大洋の主人たり、一大故鄉を造るの道果して如何。癒ゆべからざる鐵創を頑清に加へ、新興國として世界の嫉妬と畏懼の中心に立てる大日本は武裝せるスパルタに非らずや。國運は新組織を要す。完美なる國民は完美なる個人也、樹を植て一家十年の計を爲す者一國百年の長計は人を造るに在るを忘るべけん乎、武育的國民にして高義的市民、時務を知り技術を有せる人、一代の人にして世界の人を造るは一等國の國是、今日の急務也、大なる日本人を造るは大なる日本國を形る唯一の道に非らずや。新人物は新事業を產み、新事業は新國運を開く。學窓の下、西天の一方を睥睨し雄心壯圖を抱へし新國民たらんとする人よ『青年叢書』を讀め。

『青年叢書』目次は如左

◉第壹卷 武備教育
◉第二卷 遠征
◉第三卷 市民
◉第四卷 職業
◉第五卷 學校
◉第六卷 技術
◉第七卷 傳記
◉第八卷 時世
◉第九卷 實踐道德
◉第十卷 壯遊

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新刊

青年叢書 第壹卷

武備教育

紙數百五十頁以上
定價拾貳錢
郵稅貳錢

着眼『武裝したる日本』を造らんとの新制度を抱く、故に軍人のみならず全國民の普ねく兵事を知るの急を説く、皆兵主義は獨逸兵制の如く『短くして悍く』を是れ主とし、日本今後の一種至適の立案を献ず。

畫策武備敎育の内圍を大、中、小學とし、外圍を社會、家庭とす、故に舊來學校に於ける生兵法を一新し、故森文部の軍隊組織を改善し、大學、高等學校生徒の爲め特案を議し、軍隊學校間の聯絡を促がす。故に社會家庭には好摸型としてスパルタの名士リカーガスの制度を紹介す。

國防國防上の原理は萬古不易、故に原理以内日本に於る特種方畧を説き、日本の人口、歳入、地理の三大問題より割出す。

國是國民の政畧は國是を定め、國是は更に國防の主幹力を一定す、故に攻勢防禦の主幹力を論じ、西漸的大洋大陸方面に於る國是の遂行を促し、將來の政畧を『不可言不可語』の間に收む。

目次

軍國民
軍隊と學校との聯絡を開始せよ
日本の國是
軍人精神敎育の大本
何をか武備敎育と謂ふ
戰勝の社會及家庭
日本海軍小史
日本軍事
學校に於ける武備敎育
國防の原理と日本國防策
日本陸軍小史
結論

本書は最近の統計に富み、間々兵事に老功ある某將軍の意見を挿入す。雄志遠畧を抱ける青年諸君取て劍下に飜け、

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

征清壯烈談

定價 十三錢
郵稅 貳錢

大喝采を博したる「日清軍記」前後篇の後に此著出づ、「壯烈談」は征清事件發端以來の海陸戰士の逸事談也、美を擧げ眞を描く筆勢神の如し。此書「日清軍記」と並び出でゝ世の征清軍記恐らく光彩を失はん。久保田金僊氏の實見畫數十を挿む

本書に對する各新聞批評

●征清役の零聞逸事を收拾し以て此編を成す曩には日清軍記の著あり今は軍記に漏れたるものを蒐めて其及ばざる所を補はんとす彼此相須ち乃ち完璧となる國民忠烈の氣象を鼓動せしむる亦與かりて力なしとせんや（東京朝日）●著者の意は征清義戰の常山紀談を作らんとするに在りと、卷中載する所ろの紀事亦た慶長元和以前の逸聞を讀むに勝るものなからんや（日本）●征清の役起りてより我海陸將士の戰陣に臨みて勇戰奮鬪の間だに於ける美談佳話甚だ少きにあらず本書は則ち是れ等痛快壯烈の談話を悉く網羅せしもの、單に讀んで面白きのみならず一つには兵士の龜鑑となり一つには國民の元氣を皷舞するに於て寧ろ彼の乾燥無味なる長篇の戰爭記に優る事萬々ならん（中央）●著者は征清義戰の常山紀談を作らんとして本篇を著はせりと故あるかな其の叙する所の紀事片々尚且つ大和男兒が正氣にあらざるなきを其進んで國難に殉じ笑て敵刃に斃るゝの壯事快事筆々神躍り氣昂る（讀賣）●洵に是れ『征清義戰の常山紀談』、神洲男兒の本色を寫し出してなかなかに面白し（報知）●征清將士の義勇忠烈談なり、著者の意、征清義戰の常山紀談を作らんとするに在りと云ふ、書中記する所一として悲絶壯絶の談に非ざるなし、此書を讀で感奮興起せざる者は血なく涙なき無情動物也、（東京經濟雜誌）●著者の叙言に云はく、著書の微衷は征清義戰の常山紀談を作らんとするに在り、故に其記事たるや實に片々たる零聞逸事に過ぎざるが如しと雖も、讀み去り讀み來れば神州男兒の氣慨は實に天日を呑吐するの風慨あり」と、其文章の流暢と其事實の壯絶なるとによりて一讀卷を措く能はざらしむ（每日）●忠愛壯烈の好談柄に富む征清の役に若くはなし此書無數の零話を累ね間々小畫を挿み讀みて其倦を知らず當下少年者の愛讀中其首位を占むべきもの蓋し指を此書に屈せずんばあらざるべし（大阪毎日）

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

德富猪一郎著

國民叢書七冊

第二 靜思餘録

定價十錢 郵税二錢

水磨を轉ずる勢力は寂寞幽靜の源泉より來る人生の大業焉ぞ微眇の奥底に潜まりたる心靈が靜思練想せられたるの餘、發越飛躍して此に到りたるものならざるを得んや。今や戰爭の影響は社會を鼓吹して事々物々奮迅飛動せんとす、是時に於て誰か社會に向て靜思の材料を供するものぞ。若し餘録にして其萬一を値するに足らば則ち幸甚也。

國民叢書五版 **人物管見** 定價拾五錢 郵税二錢

國民叢書六版 **青年と教育** 定價拾五錢 郵税二錢

國民叢書十版 **靜思餘録** 定價拾五錢 郵税二錢

國民叢書六版 **文學斷片** 定價拾五錢 郵税四錢

國民叢書四版 **天然と人** 定價二十錢 郵税四錢

社會叢書

每月一編發兌 一冊十錢 郵税貳錢 十二冊完結

社會叢書は現今に於ける上層下層社會、學問社會、職業社會、勞働社會、技藝社會、婦人社會、青年社會、交際社會、娯樂社會其他種々の煩雜せる社會の組織及生活の現狀を描き、或は之に活氣活動を與え、或は之を改進改善し或は別に新なる社會を建設して新知識、新職業、新生活の案内者鼓吹者たらんことを期す

社會叢書は眞率、着實、精勵、有望なる社會を建設し、併せて其社會に立つべき人物を養成し、世界の上に大膨脹を始めたる大日本帝國の國民たるの資を形つくらんことを期す

社會叢書の主義は有益的、進歩的、平民的、實行的にして多く事實の點より議論を起し毫も空想浮薔の趣なく、其文章は簡明平易を旨とし婦人少年にても讀み易く解し易ければ有ゆる社會の人の侶伴たるべく又相談相手たらんことを期す

新刊

第一編 **海の日本人**

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

德富猪一郎著

三版

大日本膨脹論

定價 十錢
郵税 二錢

大日本膨脹論とは何ぞや、◎大日本の膨脹す可き命運と、大日本を膨脹せしむ可き、國民の天職と、併せて如何にして、膨脹せしむ可きやを論ず。◎著者は歷史的眼孔によりて、時務的經綸を說く。故に議論深厚にして淺疎ならず。適切にして精該なり。◎總て『國民之友』『國民新聞』に掲載したるもの。單行の論文なれども、其の脉絡貫通す。讀者或ひは如何に、著者が事に應じ、類に觸れて、其平生の見解を適用するを知るを得む。即ち看て征淸事件、急湍激流史の一卷と做すも不可なし。

近刊

日淸軍記續編

定價十五錢
郵税 四錢

日淸軍記前篇は端を朝鮮内亂東學黨に發し平壤陷落の勇擧に收め後篇は山縣大將出發より旅順口征服に至る各新聞雜誌は口々に許して曰く宛然一部の大平記を讀むが如し

續編今や刊に上らんとす

讀者此三篇を併せ以て征淸戰爭錄の完備なるものを快馬奔流の文章に求め得べし

臺灣

定價 拾錢
郵税 二錢

臺灣地圖

定價一錢五厘
郵税五枚迄 二錢

國民は其國土を知らざるべからず、臺灣は今や我か有となる、日本國民は其故鄕を知るが如く此新故鄕を知らざるべからず、而して之を知るは民友社出版の『臺灣』及び其『地圖』を讀むの外、良法あらん耶。最好の機會に最好の著とは此の謂也

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

徳富猪一郎
深井英五 合著

歐洲大勢三論

定價拾五錢
郵税四錢

新刊

誰れか世界の事は一國の事に關係なしと言ふ。世界の事を一國の事として觀察するは即ち經世家の要務にあらずや。最近二十餘年の歴史に遡りて歐洲大勢の由來を探り暗遷默移の間に當今の變局を捉へ。此變局の事情に基きて、東洋に密接の關係ある英國の力源を究め。以て膨脹的日本の上る可き舞臺を明示したるは此三論也。苟も國民的前途の運命を考へ國家の爲めに經營せんと欲するものは此書を讀まざる可からず。

發兌元 東京々橋區日吉町 民友社

民友社編纂久保田金僊插畫

軍歌 支那征伐

定價三錢
郵税二錢

湖處子、雲野通路、愛山生の新製軍歌十餘題を收む。世の滔々たる俗謠若歌と品類を異にす。美麗小本。

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

婦人科小兒科專門

赤阪區丹後町一番地
安藤邸角

女醫 大村のぶ子

速記法 自宅獨習生募集

規則入用ノ者ハ郵券二錢ヲ投ズベシ

月謝二十錢
二ヶ月卒業

東京市下谷區徒町二丁目三十一番地
速記學專修所

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

○定價
一冊 金五錢 郵税 金五厘
半年（十二冊）前金五十錢 地方 金五十六錢
一年（廿四冊）同金一圓 税共 金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話七十番

發行兼印刷人 頴娃孝之助
編輯人 家邊芳太郎
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿八年五月十日發行
家庭雜誌第五拾參號

目錄

社説

加賀の千代（永井瓢仙畫）

貧債……一

論説

食卓と教育……櫻井鷗村……二

史談

オルレアンの少女……涙處子……七
讀餘雜錄……一三

科學

光線のはなし（下）……竹越竹代……一八
松露拾ひ……市村塘……二二

文藝

嫁形氣……嵯峨のやま人……二五
訪はぬ猫……敬亭生……二九

家政

家事の經濟……三四
人造の哺乳……三五
春先の發生……三八
手藝案内……三九
梅花形の置物敷……三九
社交一斑
流行の栞……春汐……四一
夏向流行の髪具……四一
流行の蝙蝠傘……四三
玩具……四三
流行の婦人用單衣……四四
夏向洋服及其直段……四六
夏衣及其直段……四六
日用品物價……四七

雜錄

余が友の愛らしき忘想（二）……識芹生……四八
加賀の千代……五〇

時事一斑

東京市の膨脹……五一
明治廿八年の京都……五一
無烟無聲火藥……五二
佛教は如何なる有樣を以て存するか……五二
東洋貿易港の航海日數……五二
衛生の時代……五二
勤勞の時代……五二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Go gle

Go gle

家庭雜誌第五拾參號
（明治廿八年五月十日發兌）

社說

負債

世に自主の人をして奴隷たらしむることと負債より甚しきはなし。負債は人を總ての弱みに行かしむべき間道也。

青年多望の士前途に有爲の光明を望みて走るに當り、志氣奔放羈束せらるゝ所なきもの、債を負ふことに由て、漸くに其企望を屈し、空しく奇才を抱て爲すなきに終ること、世上固より某例少なからず。

堂々たる政治家にして、家國の安危を雙肩に荷ふべき身を以て、債を負ふことに由て、節を屈し、義を賣り、遂に爲めに紳士の躰面を汚すに至ること、世上固より其例少なからず。

無垢清淨の家庭にして、和氣融々、一痕の邪意なく、一片の風波なきもの、債を負ふことに由て、しめり勝ちなる家庭となり、果ては夫妻の乖離を來すに至ること、世上固より其例少なからず。

加之文人の文を賣り、武人の武を賣り、法官の法を賣り、志士の名を賣り、紳士の躰面を賣り、選擧者の選擧權を賣り、壯士の虛喝を賣り、市民の家を賣り、婦人の節操を賣り、父子の慈愛を賣り、朋友の友義を賣るより、甚しきは教育家宗教家の道德を賣るに至るまで、其初め債を負ふことの爲めに、誘惑の弱みに乘じ來るありて、一歩の踏みあやまりは遂に千里の邪逕に陷るに至りたるもの、亦た決して一二に止まらざるべし。

『金借たとて返せば恥にもならぬこと』と言ふこと勿

れ、人類の弱點は其最も多くが實に此の間より乘じ來るを知らずや。何人も借る時よりして返さぬつもりなるものなし、去れども齟齬し易きは豫定の計畫也。豫定の計畫にして齟齬せば、最初の眞實も虛僞とならざるを得ざるべし。虛僞は虛僞を生み、虛僞は罪惡を導く。愛想づかしもこれより生ずるぞかし。

たとへ返辨償却の上には毫の違算なきにもせよ。天下を敵とする勇者も恩義に敵し難きは人の情にあらずや。請托もこれより行はれ、硬骨も自ら軟腐せざるを得ざる也。

是の故にかりそめにもすまじきものは負債也。古人も借る人となる勿れ貸す人となる勿れと戒めたるを思ふべし。

勿論事業を興すためには負債も時に或は必要なることとなきにあらず。世の進步に伴ひて信用制度の漸く發達すると同時に、富の貸借が富を生み、負債が事業の興起を助くること極めて大なるべきは自然の勢也。然れども是れ主ら事業興起の事につきていふのみ。生活費用を負債する如きは、自ら其自由獨立を殺すものなることを忘るべからざる也。

論說

食卓と敎育

櫻井鷗村

『小學』といへる書の序文に、灑掃應對進退の節も、身を脩め、家を齊へ、國を治め、天下を平かにするの本なれば、之を敎ふるは、古への兒童敎育の道なりといふとを志るせり。『小學』の敎ふる處、甚だ繁縟綿密にして、其形式上の訓戒を一々に行はんとは、到底稚童女のなし難き處なるのみか、却て之が爲に、其品性の

Google

發達伸暢を害せらるゝ尠からざるべし。されど古聖賢の教へられしが如く、居常些細の出來事とても、之を謹むと謹まざるとは、兒童が後年の品性に、大なる影響を與ふるものなりといへる、形式を超脱せる大精神は、寔に克くも說かれたることにして、此大精神こそは千載まで、兒童教育の守るべき道なめれ。凡そ兒童の教育に於て、尤も必需なるものは、讀書筆算脩身などの殊更なる教訓よりは、無乃却て、おろそかかになりやすき日々夜々の些かなる出來事の中に在り。家庭教育の重んずべき理由は、父母が口もて、手もて、親しく教へを子女に授け得らるゝが為には非ずして、母が和かに温き手を以て、小兒の頭を撫づる間、父が正しく坐して、一服の茶を啜る間に、無量の教育の籠れるが故なり。家屋といひ、衣服といひ、食卓といひ、夫々皆兒童の教育に預りて益をなすものなり。『小學』にも、衣服の制、飲食の制などの、嚴格なる脩身の條目をたてられたるが、此等はいはゞ支那一流の小笠原流禮式にして、今時の小供に教へなば、そんな馬鹿な事が出來るものかと笑ふべきが、おほ其中に籠れる聖賢の精神は推して今日にも用ゐべき事なり。

飲食は禮の本といへることあり。予は其意味を擴充して、食卓は兒童教育の一大要件なりといはん。飲食の禮式は時世相當に小兒に教へ置くべきは素よりの事にて、饗應の席などにて兒童の行儀悪しきは、其家庭の躾の程の蔑まるゝものぞかし。されど予が食卓の教育に關すること頗る大なりと思ふものは、宴席に侍する時などの處作の上にはあらで、却て一家の父母同胞が團欒して、粗餐ながらも共にするの間に在るなり。古人の語に、菽を啜ひ、水を飲みて、其驩びを盡くすといふことあり。またソロモンの箴言にも、睦じうして一塊の乾けるパンあるは、爭ひありて宰れる畜の盈たる家に愈ると教へて、父母同胞膳を共にして、些のものたりと

も之を股ちて食ふ有様は、平和中の平和、幸福中の幸福にして、之によりて不知々々小兒の品性の感化養成せらるゝを那計ぞや。父母も同胞も共に同一の食物を相分ちて喫ふとは、兒童の品性の伸暢に莫大の効能あり。夫れ人は自由平等を好むものなれども、凡そ小兒の如く之を願ふものはなし。小兒が笑ふも泣くも怒るも、多くは自由平等の爲なり、隣家の小兒が、我が有たぬ某の玩弄品を有せるを見ば、我も等しく有せんとを欲し、また貴族の公子と雖も、平民の童女と伍しては、自ら區別する處なきなどは、小兒が自由平等を欲するの好證なり。素より此自由平等の本能を導きて、我儘氣隨の悪しきに陷らしむるは、いと謹むべきとなれど、之を正しきに導くは眞の兒童敎育の精神なり。小兒は自由平等を欲するが故に、什麼に茶漬に澤庵のまづきものとても、これ父も母も兄も姉も、共に食ふ處の物なりと知らば、いたく滿足して食ふべきも、彼の妹の膳には隱されたる好物あり、此の兄の膳には異りたる珍味あるを見ば、兒童は面白からぬ感情を惹き起して、自然ヒガミ根性を釀成するに至る。多くの家庭にては、小兒等には追立つるやうに食事せしめて、其後にて、家父はゆる〳〵晩酌の二合半を傾け、刺身燒魚などの馳走を、我獨り食ふの風なれども、人の欲するものは、我も欲しと思ふ、自由平等なる小兒の感情は、此種の家庭風習の爲に、甚なる方角に吹き付けらるべき。父の膳なるものを欲しさうにすれば、母に『其前はいやしいよ』と叱り付けられ、睨め付けられて、いぢけ込み、分ち與へられ得べきものを、與へられで欲しさうなる目付したるは、小兒が根性のイヂケ、ヒガミに傾きつゝあるの證にて、其折々に品性の伸暢の傷害せられつゝあるなれば、恐るべき事なり。『御前はいやしよい』と小供を叱り付け、睨め付くるは、却て母の無理とやいふべき。母が小兒に平等を欠ぐとは、

Google

即ち小兒にいやしきを教ふるものなり。世の多くの父母は、その壓制なると秦の始皇、羅馬のネロ帝にも及ぶべきものなり。其源は自己の業なるを、過ちあらば、一概に之を小兒に歸して、折檻を加へ、鞭撻を加へ、小兒が若し之を言譯せんとせば、其是非はいはで『親に口返事する』てふ酷なる罰則によりて、一層の嚴刑に行はる。予はルウサウを學ぶにはあらねども、小兒の自由平等心を勉めて賊ひ、其後年の品性の缺損を生ぜしむるものは、其罪父母に在りて而も自ら己に許すに猶是なるを以てすといふも、敢て過言には非らじ。自ら羅馬の市街を焼きて、其罪を同市の基督教徒に蒙らせたる殘酷暴虐なるネロ大帝の小摸型は、世の父母たるものに於て見ると極めて多し。父兄のみ幼稚なる小兒に與へざる珍味を啖へばとて、何の味ひかあるべき。子に隱くして食ふ程甘しといふ父母は、此世ながらの無慈悲なる鬼なりとやいふべき。若し我膳にのみ置かれたる菓の物を、些少なりとも頒ちて、小兒が皿に載せ與へなば、其時は安心と喜悦との色の小兒が滿面に溢るゝを見ん。此喜悦と安心との色あるは、是れ兒童が品性の素直に、寛やかに伸暢開發するの證據なり。一皿の菜、一斤の肉、猶如此く兒童敎育に大効力を及ぼすとせば、父兄何ぞ自ら一時の美味を貪り、無慈悲の行ひに忍んで、小兒の品性を害するとをなすべけんや。

或る處に一商家あり。大商店の事とて、番頭より丁稚小僧に至る迄、十數人を雇使せるに、其主人は通常大家の旦那などゝは異にして、度量廣く、勘考深き人にて、己れ獨り山海の珍味に飽きて、食事するとなどはせず、食事には大座敷に、丁稚小僧迄も、悉く一同輪に坐せしめて、一樣の食物を粗末ながらも、自ら共にするとせるもの故、此公平なる主人の志に感じて、雇人等皆骨折り苦勞を厭ふとなく、主人大事、商賣大

事と心掛けて、家道愈繁昌を重ねたりとか。食卓の些事ながら、思慮ある人は、彼主人が如く、之に處するに其途宜きを得、家道繁盛の基を開きたり。この人の精神は、兒童家庭教育の上の摸範とすべきなり。

孔子は食するに言はれざりしとの事なるが、成程食事に侍りて、喃々囂々と喋べるは、あまり風躰よき事にもあらず、さりとて頬脹らかして、だんまりなるは、折角の珍味とても味無くすることなり。中庸は適當の快談を試みつゝ食卓に侍べることにて、さすれば味無きものも味多く、家庭團欒の平和福祉の美しき狀態なり。而も食物器具より小話を惹き出すは、小兒が爲め、智識開發の好楽なるべし。而も食時は家族團欒の唯一好機なれば、之を利用して家庭の平和の增長、德風の進歩を計るべきなり。

なほ食卓に侍しては、衣服躰度を正しうすると必要なり。寝衣の儘にて、兒女に朝飯せしむるなどは宜からず。また家父がアグラ組み、なほ下等なるに至りては、夏期の晩食に往々目擊する如く、大袒ぎなどして、食事するは、小兒教育の爲に甚だ謹むべきなり。西洋人が食卓に侍して、其の衣服を整ふるは、心掛よき務めなり。

こは少しく別事ながらいふべし。兒童に菓子果物等を與ふるに、彼に與へて此に與へざるなどは、兒童の平等心を傷ふものなり。また一人が他所より貰ひ來りたるものは、些少宛なりとも、他の小兒にも分與せしむべし。他人と物を分つてふ美しき德性は、之によりて養はるべく、是れ後年一家の爲、一國の爲、果は天下の爲に、喜憂を分つてふ高尚なる精神の源となるべし。またしか〳〵の事をなしたる褒美とし、或は使賃など稱して、菓子果物等を與ふるは宜しからず。必ず筆墨紙書籍の類を以てすべし。されど菓子果物にも限らず、筆墨紙の類とても、之を以て小兒を誘ふは教育

Google
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に害あり。是れ誘ふに甘きを以てし、陷はすに利を以てするとにて、此習ひ性とならは、成人の後利に就き、甘きに隨ふの賤しむべき根性を有するの輩となるべし。彼賄賂を以て、主義を左右にする腐敗政治家などは、恐く幼少の頃、其母が彼に陷はすに、利を以てし、誘ふに甘きを以てしたりしとの習の、さるさもしき性根となりたるならんか。

食卓の教育に關すると、なほ緻密に說かば、種々なる事も他に多かるべけれども、先づ其概略を述べたるまでに了へて、世の母たらんものに與ふるに、食卓前の些細の事柄も、兒童家庭教育に大に教育するものなりとの暗諭を以てす。世の母たらんものよ、女性的眼光の綿密なる處を、かゝる必要なる點に應用して、家庭出來事の一點一畫も、小兒の教育の爲に謹しみを加へられよ。

史談

オルレアンの少女

余は斯る異女子を語りて、故らに血あり熱ある婦人社會を動かさんと欲するものにあらず、然れども今の時は女子にまれ男子にまれ愛國心の權化を要する秋なるを思へばなり。

湖處子識

フランスの北部、今は日耳曼の一領土たるロレイン州の邊陬に、トムレミーと呼ぶ、一寒村落あり。十五世記の初に當つて、此村にヂヤック、ダークと呼ぶ一人の農夫、イサベラと稱する女を娶つて共に栖めり。世界が嘗て生みたる最も不思議なる女子、最も大なる愛國者ヂヤン、ダークは即ち此の無名の農夫の一女にし

Google

て、彼は千四百十二年を以て初めて父母の白屋に日光を見たり。

彼が生れし時、佛國は危急存亡の際なりき。是より先國王チャールス六世嗣子なくして殂落し、英王エドワード三世其母の佛王の妹女なりと云ふを以て、王位相續の權利を主張し遂に海を越えて兵を佛國に加へしより、有名なる「百年の役」の端は開かれ、佛國の干戈を蒙り、生民塗炭に苦しむこと今に既に六十年、英兵既に潮の如く四面より環合し、佛王チャールス七世は、僅かに孤島の如き一小天地に嬰守して、防禦既に力盡き、空しく運命の回るを待つのみなりき。

トムレミー村は猶ほ暫らく戰塵を蒙らざりしかば、ヂャンか幼時は穩かに故郷に過ごされにき、ヂャック夫妻はヂャンの後に猶ほ三男兒と一女兒とを擧げしが、ヂャンが最も愛し慈みたる小妹は、嬰兒にして世を去りぬ。ヂャック夫妻の畢生の心願は、其兒女を正實に長つることにありきと傳ふ。ヂャンは文字の敎を享けざりき。然れども印刷術發明前の時世に在つて、少數の僧侶の外に、ヂャンたらざるもの幾人かある。然り彼は文字を識らざりき。然れども當時普通に認めたる女子の敎育を彼に加ふることに於て、父母は決して惰らざりき。イサヘルは彼に織ると、績くと、縫ふとを敎へたり、ヂャックは彼に神に仕ふると、祈ると、感謝するとを敎へぬ。母は彼に人の事を敎へ、父は彼に天の事を敎へぬ、彼が家の基督敎なると、彼の父の神を懼るゝものなると、是れ彼が爲めには貴族の血よりも尊とき天賦なりしなり。何となれば婦人をして不朽ならしむるものは大望心にあらずして宗敎にあればなり。

諺に曰く女の意は弱し然れども女の情は鐵よりも牢しと、ヂャンは恐らく斯種の人なりき。彼が舞踏會よりも、會堂を擇ひしことは、其の仲間の笑ひ艸なりき。彼

は說敎師の面を見、目にて說敎を見るの類にあらず、耳にて聞くの人なりき。彼は容易く泣いて又容易く笑ふ流にはあらざりき。彼が思慮ふかき心に一たび落ちたるものは、良き地に蒔かれし種子の如く、實を結ばずしては止まざりき。彼は活ける神を信じ。活ける神常に彼と共に在すを信じき。彼は其父母に隨ひて田園に、種まく時、小憩の際、父母は屡ば彼の影を失ひ、目にて搜したる後、地に伏して祈る愛するものを、隱れたる隅に看出すが例なりきと。

トムレミー村を距ると遠からずして、公道の傍に、老いたる山毛欅樹あり、其枝は弓の如く彎曲して地に着きたり。無邪氣なる土人は、之を「神樹」と呼び、其樹より數十歩の邇きに湧きて流るゝ泉を「神泉」と稱へて、其樹と泉を、祇拜供養の本尊として、其日には村も動くばかりに賑ふ中に、獨り寂しき會堂を訪ひ、獨り聖母の神壇の前に立ち樂しげに其の編み作れる、花冠を戴ぐるものはチャンなりけり。

チャンを識るものは曰く、彼は平素言寡く、人に對しては極めて遠慮勝なりきと。チャンの如き子は到る處に之を見る。チャンの父母の如く其子を取り扱ふものは幸なり。

然して彼が家內の仕事のみに鎖されずして、家畜や馬を戶外に牧ひしは、彼が後年馬上の天使として働く爲に、豫め設けられし準備なるが如くなりけり。

然れども斯の如きはチャンの幼時の半面のみ。彼は他の半面に於て、國難と共に生長したり。

トムレミー村は仁なる里、其民は皆、國王に忠信なる民にして、少女が一家も亦其一に居れり。渠等は是まで周圍の慘運を慨きつゝ來りしに、慘運は今既に席の如く渠等を卷けり。佛國の貴族にして敵の相手たる、バルガンデー侯の騎兵隊は來り襲ひて、渠等の故鄕を馬蹄に蹴け、渠等をして其家財を負ひ、家畜を曳て、

Google

四もに奔らしめぬ、ヂヤツクは家を挙げてニユーフチヤツチーと稱する一小邑の一逆旅に投ぜり。是はヂヤンが十三歳若くは十四歳の時なりき。嘗て千古の歴史を驚かしたるオルレアンの少女の異象は速に起れり。史家をして往々彼を逆旅の一小婢と記せしめしものは、彼が一家に對する逆旅主人の保護と親切に酬ゐんと、彼自身其の家事を幇助せしに出るものなるべしと云ふ。

オルレアンの少女の異象は聖書以後の鬼蹟なり。然れども單に神の方面に於てのみ之を考へて、人の方面を遺すは、吾人は之を解する所以に非ずと思ふ。人の方面を考ふると如何。「國難と少女」なる疑問を解くと是なり。

「國難と少女ー」。是の難問に對して、紀傳家は沈默を執れり。然れども吾人は容易に之を推測するを得べし。初めに兵端を啓きたる英王エドワード三世は既に殂せり。然れども戰は猶ほ止まず、戰爭の繼續者は故の佛王の女を娶り、其正統の相續者を王位より斥けて自ら簒ひ、然して自ら正統の王と呼べり。是は不義不仁の甚だしきなり。戰起つてより、既に七十餘の歳月を經たり。其間佛民の土地を逐はれ、家財を沒せられ、生命鉾に血ぬらるゝものは彼何の罪かある。嗚呼是れ天人の共に怒る所にあらずや。忠信トムレミーの如き村も馬蹄に懸けられ、其民は怖ぢ惑ひて道路に漂ふ。是れ神の義を思ふ志士仁人をして、天を仰ひて審判を叫ばしむるものに非ずや。敵の暴虐天地に滔る、忠信、然して無辜、然して助なき佛民たるもの、戸を鎖ぢて其家庭に蹐る所果して何事なりとかする。渠等は救を待ざりし乎。渠等は復讐を呼ばざりしか。神は人に、苦しめるものを救ひ、虐ぐるものを亡ぼすとを誓ひ玉へり。渠等は凡ての中に、最も不義を悪む所の神に號んで、其情を動かさんとはせざりしか。イスラエルは一

Google　UNIVERSITY OF CALIFORNIA

度パヒロソに囚はれしも、遂に再び故土に返りて却てパヒロソの亡ぶる時は來りき。渠等は神の昔爲し玉ひし如く、今も猶ほ爲し玉はんとを祈らざりしか。之を要するに渠等は饑え渇く如く救主を待たざりしか。吾人は然りと答ふる能はず。人窘しめば神を呼ぶ、神を呼ぶ家庭は會堂なり。吾人は想ふ、國難は敬信なるヂャック一家を會堂に變へ、然してヂャンの小さき、柔かなる情か、其父の口によつて、如何に國難に觸れしかを。ヂャンか所禱の人なるとは、余は獨に之を言へり。然れども渠は最も多く何を祈りたりとするぞ。吾人は多くの場合に於て、父の禱を禱る兒女を見る。猶ほ十三四の妙齢にして、禱るべき僅かを持ち、然して禱るべき多くを持てる父の天井の下にありし時、彼は父の禱を禱りたるにはあらさるか。彼は復讐を禱りたるにはあらざるか。救濟を禱りたるにはあらざるか。凡てのもの丶上に、救主の出でんとを禱りしにはあらざる歟。然して神は却て此所禱の人にして然も獻身的精神に熱せし彼を擇びしにあらざる乎。

是は凡て想像のみ、然れども余は自から是を以て其秘密の幾分を解し得たりと信ず。

彼が異象を見し時は、或は彼が十三歳なりと云ひ、或は十四歳なりと傳ふ。

其の謂ゆる異象とは如何。彼が自から世界の歴史に告ぐる所は是なり、ある夏の日彼は父の菜園に坐してありしに、會堂の方に當つて、天開けて電火閃めくを見き、其時上より聲ありて、彼の敬信と善行を嘉し、神彼を惠み玉ふべきとを告げぬ。是れ初の異象なりき。次の異象は曰く、其後ある日、彼は青草の野に羊の群を看護しつ丶ありし時、彼は往に聞きたる同じ聲を聞き、聖カザリン、及び聖マーガレットの如き威容の空中に顕はれしを見たり。其聲は自から、天使の長なるミカエルなるとを語り、フランスが彼の手を透して英

Go gle

國の軛より解かるべしとの意味を、幽玄なる言語を以て云ひ顯はしたり。其時彼は瑞喜の涙に咽び、神の器とし自己を擇び給ふ神慮に酬ひまつらんと、終身嫁せずして其天職を全ふすべきを誓ひぬと。

然れとも彼の父母は其女の云ふ所を省せざりき。渠等は天の事を彼に敎へたるも、其結果をば測らざりき。是より先き、彼は處の自由民たる一青年より、結婚を申込まれたりしかば、略之を諾したりし父母は、其女の戰場に飛びこまんとを恐れて、遽かに彼を嫁せんとせり。青年は彼の其意に應ぜざるを見、佯つて彼が結婚の約を破れりと稱し、法庭の力を假つて彼を服せしめんとせしかば、チャンは出で、法庭に立ち、憚るとなく其無實を辨ぜり。公事は固より彼のものなりき。彼が精神の强固は、始めて公衆の前に試られたり。

佛蘭西の運命は、一日一日收縮し來りぬ。英軍は着々と攻め寄せ來りぬ。一府一邑、一武器の抵抗なしに陷いれられ、オルレアンの王城も、今は遂に赤裸に遺されぬ。敵は今七十年にして初めて最初の目的を達したり。最初の目的とはオルレアンの合圍是なり。オルレアンの陷落は佛蘭西の亡國を意味するなり。オルレアン、敵手に落ちなば、オーバーク若くはドーフヒンの山中が佛王の退隱處にして、麋鹿狐狸が其臣民たるあらんのみ。

終まで精忠なるオルレアン府民は、終まで嬰守すべきの議を決せり。渠等は其中より一人の知事を推撰し、防禦の責任を擧げて其手に委し、其命を聽けり。渠等は生命を獻けたり。渠等は其の負擔し得るよりも多くの軍事費に醵出し、敵に糧を與ふるの憂の故に、甘じて府外數里の田野を荒らし、盡く其間の建物を打ち毀てり。渠等の內武器を執るに任ふるものは、盡く出て隊伍に列し、然らざるものは會堂に集會して、晝夜の祈禱に神助を叫べり。

Digitized by Google　UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然れども敵に兵糧攻の策を決し、府を環つて壘砦を築き、府民の降るまで久しきを持したりしかば絕望したる府民は一時、或は突貫して敵を惱かし或は援兵の來り加ふるに勢を得、或は一方を破つて糧を運び入るゝなど兎に角一冬を維持したるも、今は糧食著しく減じたりしかば、渠等は宛も鳥の樹上に棲むが如くに困逼し、非常なる救助の天より下り、地より湧くに非ずんば、春に先つて餓死するか、然らずんば敵の慈悲を乞はざるべからざる悲運に會せり。

讀餘雜錄

（一）烈婦の一隊

虎を狩る獵師は、雄虎よりも雌虎を恐ると云へり。思ひ切りたる婦人の前には、何者かよく立たんや。

昨年の秋、土耳其の暴兵大擧して小亞細亞なるアルメニヤの基督敎徒を襲ひ、村を焚き掠むる數百、人を屠る數千、慘狀言語に絕せり。或は基督敎徒を空に投げ上げて、林の如く銃を揃へし銃劍の上に落ちしめたるものあり。數十の老幼を一室に閉ち籠めて、四方より火を放ち活ながら火葬したる者あり。小兒の髮を握りて、地よりもたぐる二三尺、劍を以て腹手足の嫌なく突き通したるものあり。之が爲めに大に歐洲の憤怒を惹起し、今に到て事おさまらず。

此慘憺たる虐殺の間に、アルメニアの勇士某は一團の義兵を糾合し、或古城に楯籠りて、土耳其の暴兵を防げり。已にして彈藥糧食乏しきに到りしかば、彼は部下の士を率ゐて竊かに城中を脫し、彈藥糧食を求めんが爲めに去りぬ。跡には彼が妻及一團の婦人老人小見殘れり。土耳其の兵は愈迫り來りぬ。殘りし婦人の一隊は甲斐々々しく此處彼處の持場を固めて、銃を發し敵を防げり。或は幼兒を背負ふて素足になりて銃を放つ者あり。或は石垣の蔭に敵丸を避けつゝ、泣き

むづかる孩兒に哺乳せしめ、終りてまた戰に來る者あり。衣引き裂きて疵を裹み、また敵を狙擊する者もあり。母の側に立つて敵丸の間を去らざる小兒もあり。流石に强猛の土耳其兵も、一隊の婦人の痩腕に守らるゝ此古城を攻めおとし兼ねて見へたりき。

然れども力は終に勝ちぬ。一郭一郭次第に陷りて、今は銃を放つ可き距離もなきまでに敵は接近し來り、一隊の婦人は短劍を拔き連れて込み入る敵を防ぎしも、終に支へ兼ねて十五六人は早や敵の俘となりぬ。俘となりし婦人は一同に敵の本營に引き行かれ、「卿等基督敎を打棄て回々敎徒とならば、卿等を赦して妻にすべし、否ならば白刄の下に卿等の命は絶たむ」と云ふ敵の言葉も終らざるに、一齊に「否」と答へて無殘の死を遂げたり。

殘れる婦人は次第に退きまた退きて、今は城の最高處に據れり。後は三十丈もある可き絶壁直ちに底知らずの壑に下り、前には土耳其の兵踊躍して迫り來りぬ。此時主將の妻は、持たる短劍カラリと投げ棄てゝ大聲に叫びて曰く、姉妹達！事は迫りぬ、土耳其の畜生兵士の手に落ちて辱めを受ては我等の夫に面目なし、我敎の爲めには猶無念なり、イザ玉へ、最期を急がん」と。言終らざるに、兩手を廣げ、雲の如き髮サット振り亂して、絶壁の上より飛び下りぬ。見るより他の婦人は先を爭ふて飛び下り飛び下り、一人も殘らず深壑の中に飛びぬ。母に伴ふて最後まで退き來りし七八人の小兒も、先を爭ふて絶壁の下に飛びぬ。

＊　＊　＊　＊

讀み來れば、小說の如し。然も此れ西字新聞に記する所の一節なり。

（二）　歷史に特筆せらる可き一老嫗

語に曰く、「白髮は榮の冠なり」と。當時英國に於て眞個に其の白髮は榮の冠たる婦人兩名あり。老女皇とナ

Google

イチンゲール女史是なり。

ナイチンゲール女史此月十五日を以て恰も七十五回の誕辰を祝はんとす。老ふること若し女史の如くにして老ひば、老もまた樂なり。白髪若し女史の如くにして生ひば、白髪は眞に榮の冠なり。女史の一生に就ては、世人の夙に知悉する所、本誌また曾て其梗略を叙したれば、今更贅せず。唯考ふ可きは、女史は何故に成功したる乎。

天然の傾向は成功の原因なり。人形の怪我をいたはり、犬の手疵を繃帯せる少女は、即ち後來のナイチンゲール女史なり。

準備は成功の原因なり。クリミヤのナイチンゲールを見る前に、十餘年の辛苦修業せる看護婦ありき。決斷は成功の原因なり。クリミヤ戰爭の機會來つて、女史は決然身を以て之に投ぜり。女史は外温靜にして內確固たりき。女史は思慮周到にして意思堅固なりき。女史は献身的精神に加へて事務的伎倆を有せり。是れ女史が一連に立ちつゝくること二十四時間、一時に患者を預ること四千人、纎弱なる婦人の身を以て千載に殘る可き光の模範をクリミヤに輝かしたる所以なり。

我等は女史の生涯に就て、左の教訓を學び得るなり。曰く、吾天然の傾向を知り、十分の修業準備をなし、爲す可き機會來らば一身を投じて爲すべし。靜かなる者が勝つなり。周到なる者が勝つなり。意思强き者が勝つなり。實際の伎倆ある者が勝つなり。而して其の根本は献身的精神なり。

何人も世間の眼前にナイチンゲールたることとは能はじ。然れども少なくも上帝の眼前にナイチンゲールたることは苟も其心ある者は皆之を能くす可し。

*　*　*　*

一生の花とも云ふ可き事業を成して後は悠々として老ふる者なきにあらざるも、ナイチンゲール女史は確に然らざりき。精細にして正確なる看護及衛生に關する數卷の著書は、其病氣の間に成れり。歐米各國の衛生事務は、女史の助言を受けたるもの多し。女史クリミヤより歸りし以來殆ど四十年、常に病苦と戰ひぬ。然も女史は怠惰ならざりき。

此頃女史は一通の書を各村落農家の母に寄せて、其息子娘を成る可く壯健に皮膚も奇麗に心も奇麗に育て上ぐ可き事を勸告し、また曰く、

兎に角人間は健康が常にて、病氣は變にて御坐候。倒れぬ樣に立たせ與るゝ者は少なくて、倒れし後に扶け起す者の多きは、嘆かはしき次第に候。

by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此手紙の冒頭に、女史は書き起すらく、
親愛なる勞働の友達よ。妾も亦勞働する婦なり。妾が一言聞き玉ふ可きや。
女史の爲人は此短かき句々に明かなりと云ふ可し。

* * * *

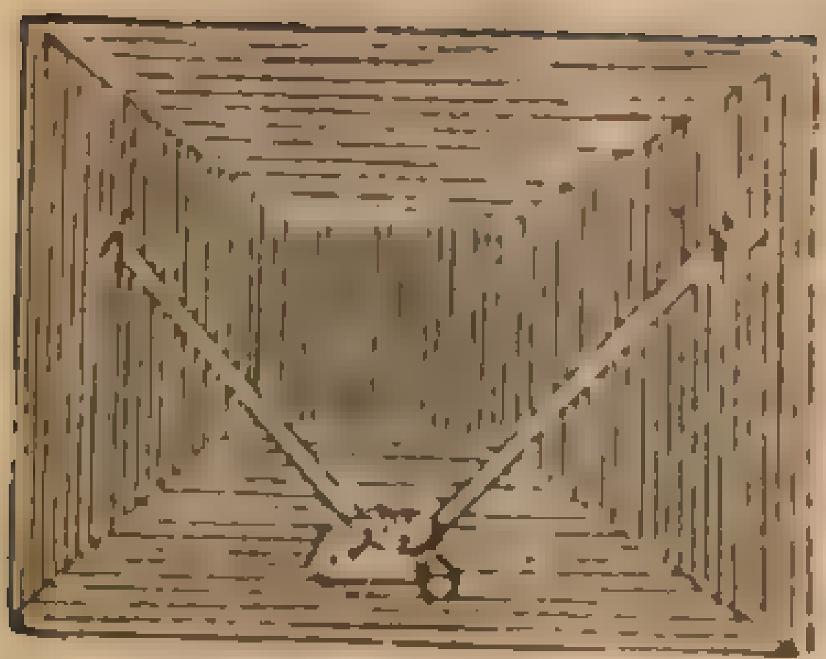
女史は言の人にあらで、事の人なり。故に空しき聲や、虚しき響を嫌ひて、新聞記者などにも面會するを好まず。然も看護衛生の事に關しては進むで凡ての人に接す。其家は倫敦にあれ共、大抵はバッキンガムシアなる其妹の家に寓す。
女史は丈高き婦人にして、やゝ肥へたり。數年來病苦常に身にあるも、其顏にあらはさず。髮白く老顏美はしく、手足纖く、音聲低ふして美なり。時に音讀し、往々唱歌す。熱心なる基督教信徒にして、また甚だ讀書を好み、室內には新聞雜誌紙筆書狀堆積せり。女史常に快活にして、七十五歲重ね來つて、猶甚だ老いず。世人はナイチンゲール已に老衰と思ひ居るも、四十年前クリミヤに赫々の働をなせし彼女は、今猶人類の福祉の爲めに其殘年を供し居るなり。
クリミヤ戰爭已に終り、英國陸海の將士目出度本國に凱旋するや、倫敦に於て一大宴會あり。宴酣にしてエッラフフオルド伯爵起立して衆賓に向ひ、クリミヤ戰爭中後來英國史に磨滅す可からざる事蹟を殘したる者の姓名を投票せんと發言し、衆賓之に同じて投票し終り、一々開票して行きたるに、恰も申合せたる如くナイチンゲールの名を記しありき。
試みに十九世紀の婦人中其生涯は尤も健全なる教訓を與へし一人をあげよと云はゞ、百世子孫の投票は多く今や七十五歲の誕辰を迎へたる英國の一老嫗に向つて落ちむ。

科學

光線のはなし

竹越竹代

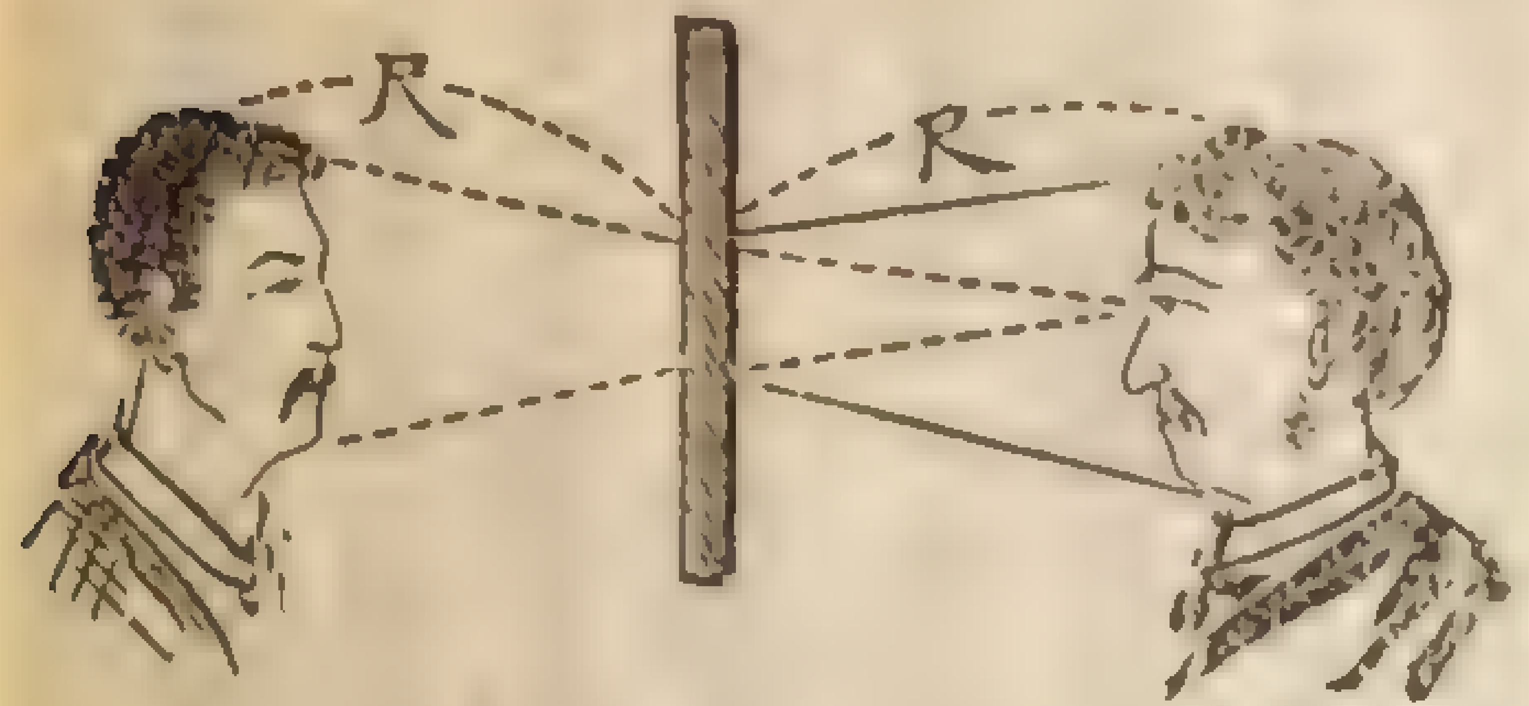
引き續きてこたびは光線反射のことを話すべし。こゝに第一圖に示めせるは、四方の窓も戸も堅たく閉ざしたる暗室に、たゞ一とつの穴（イ）を穿がちたるところ也。さすれば、光線はその穴より棒を刺し通ほしたる如とく直つすぐ、進み入りて、（ロ）の床上に達すべし、



第一圖

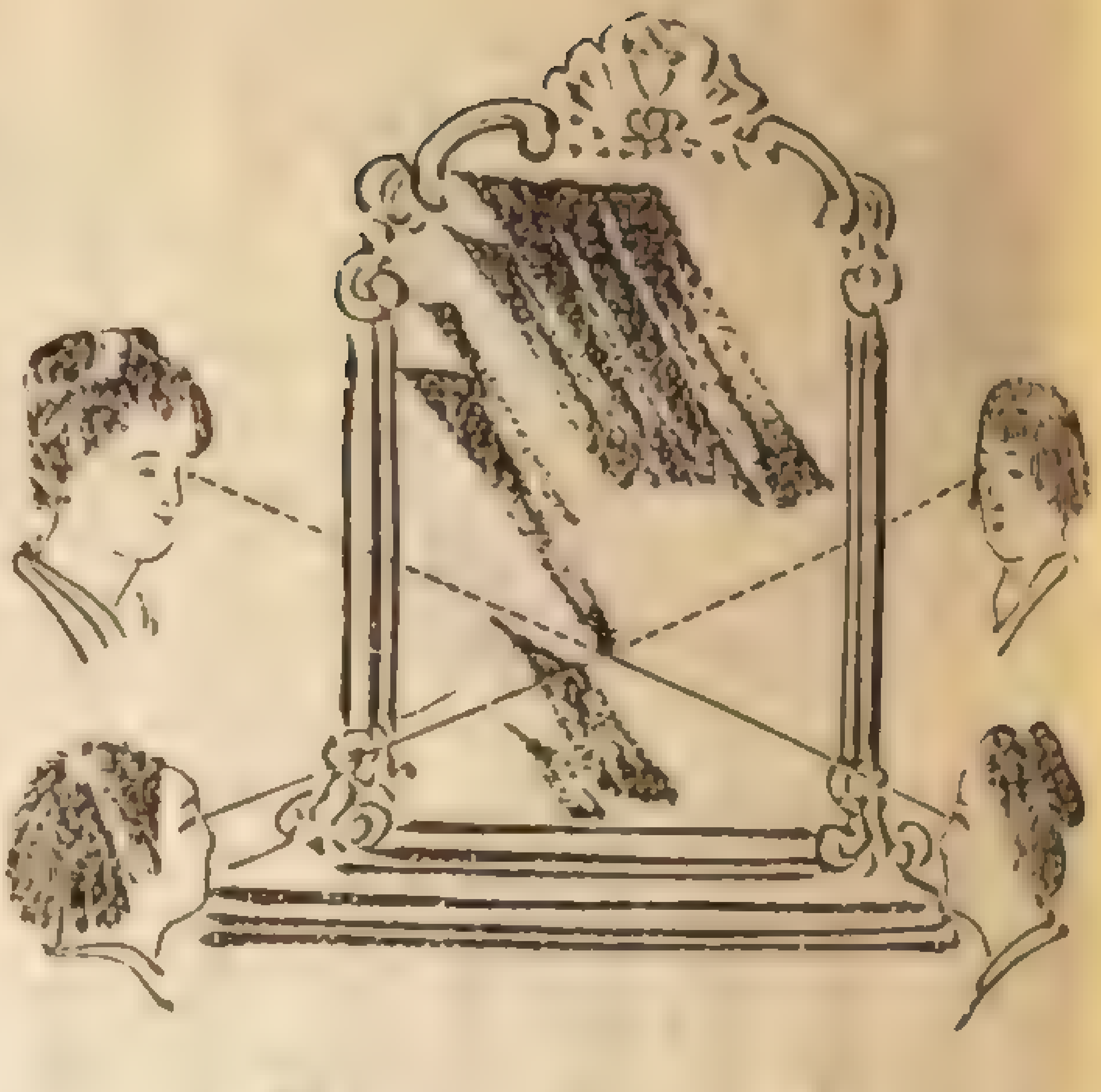
此の時き（ロ）の所に一片の鏡を置くときは、今まで一本の棒なりし光線は、ゴム球の打たれし時の如く、見る中に挑ね返へりて、時計の五時（V）の標の如とく、反對の壁なる（ハ）の所に達すべし。理學者はこれを投射角と名づけ、光線の法則をこれより定ためけり。そは進み來たる光線と、反射する光線とは、常に其の角度を同ふして違がへざるが故へに、法則を一定するを得る也。

今ま、人が鏡の前に立ちて寫つす姿容は、第二圖の如とく、一尺を隔だてゝ立てば鏡の中にも一尺を隔だてゝ寫つり、二尺を隔だつれば、二尺の奥に影は寫つる也。たとへまた、鏡に向ひたる位地の都合により、本人にはその影見へざることあるとも、こは全くうつらざるにあらずして、たゞ位地により自分の目に見へざるのみ、その證據を求めんとならば、むづかしき業にはあらじ。第三圖の如く、



第二圖

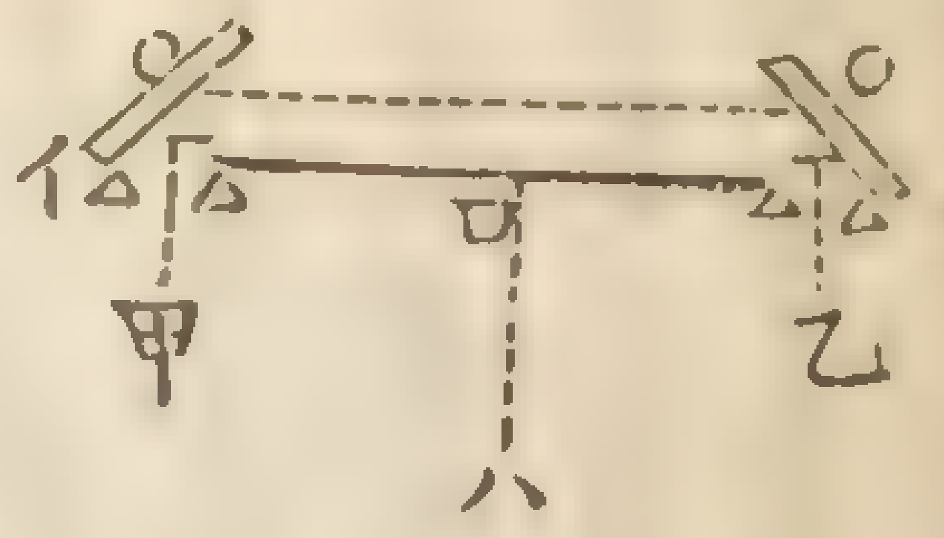
Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



第三圖

鏡の兩端に、各々自分の形の見へざる位の所に立ちさて、鏡の中を見るときは、己は見へずとも、互がひに一方の人の顔は見るを得べし。又たその距離も先きと同なじく、一尺を隔だつればー尺の後に寫つり、二尺を隔だつれは二尺の後に寫つるべし。

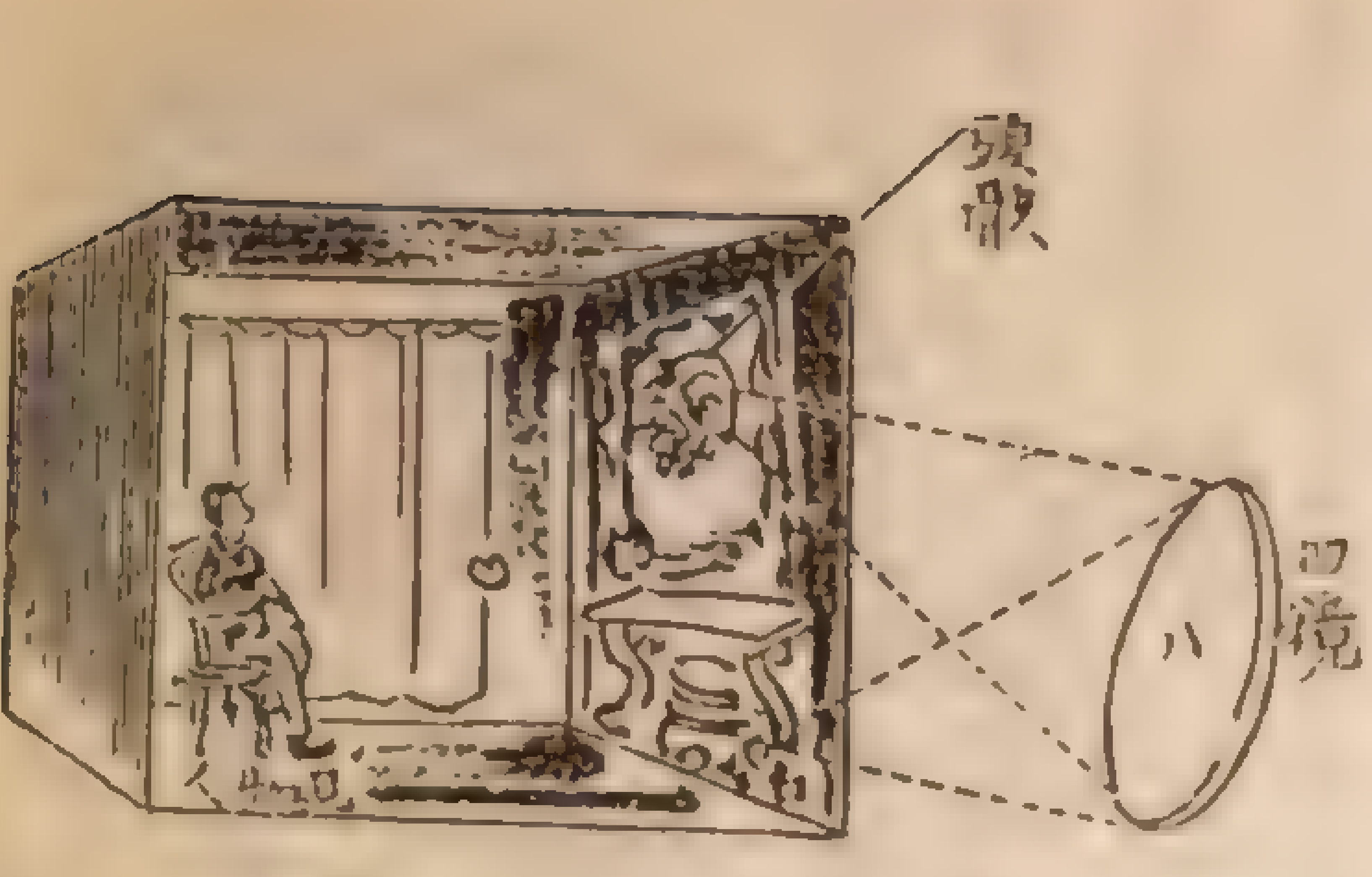
右の理により、魔術師が無學者を驚どろかしむる一つの鏡あり。この仕掛けは、第三圖の如とく、(イ)(ロ)(ハ)と(ハ)(ロ)(ニ)との二たつの室の(△)の記號ある所に、何れも入り口を設け、其の入り口より、向かふの室に入る所に、各々姿見鏡位の大いさの硝子に、金ぶちか何にかを付けて、一見鏡の如とく見せかけたるものを備なへ、その向ふの(○)の記るしのある所に、各々四十五度の傾きを以て、こたひは眞實の鏡を備なへ、其の鏡の兩端は、何づれも先きの(△)の記號を付けたる入り口にてかくし、一見して鏡のあるを知らしめざるほどなるを宜しとす。さて右の道具立て出來たるとき、(甲)(乙)二人を召し來たりて、何づれも入り口に備なへたる、硝子製の似せ鏡に向かわしむるに、前の仕掛けを知らざる人は、何づれも金緣の硝子鏡を、眞の鏡みと思ひて、己がすがたを寫つさんと近かよるに己の姿は、少こしも寫つらで、返て(甲)は(乙)の容



第四圖
魔法の鏡

を見、(乙)は(甲)の容を見るべし。元とより(甲)と(乙)とは、室を異にするが故へに、互がひに隣室にある人の姿の、己が眼中に入りしとは、知らざるが故へに、不思議は忽に胸中に沸き返るべし。

猶ほ一しほ不思議なるものあり。一と度び西洋にて流行せし魔術のよしなるが、第五圖によりて説明せば、



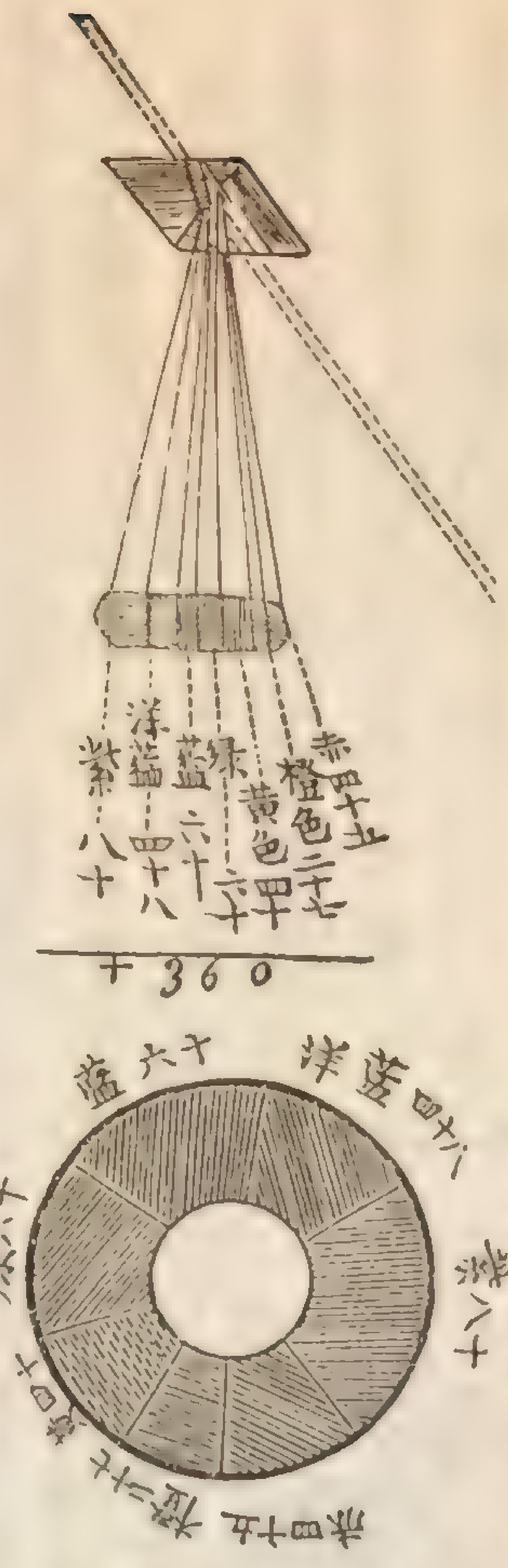
第五圖

容易に解するを得べし。即ち見物人の集つまりたる、室の正面には、額淵を以て裝ほひたる、見物人をして額と見せしむべき(イ)の窓口あり。(ロ)の記るしを爲せる所ろの後室に、見物人に見せんと欲する物品を備へ、窓の後にては香爐に火を點じて烟を立たしむべし。さすれば(ロ)の所にある物品は、(ハ)の凹鏡に寫つり、反射して(イ)の窓の口に烟の中に顯るべし。第五圖は(ロ)の所に頭骸骨を置たるが故に、窓口にその蔭の顯れたるを示せるもの也。此理により手品師は、種々なる物品を用ひ見物人を欺くを得べし。たとへば始め美しき菓子、果物たるを顯らわして、見物人をして之を取らしむるに、元とより實物ならぬ物の、取り得べくもあらざれば、手を延ばし、精神を入れて、取らんと試むるうち、俄わかに恐ろしき拔刀、或はいやらしき骸骨等を更へて顯らわすに、道理を知りたる者すらも、氣味の宜ろしきものならざるに、まして其の理も解せざるもの丶、いかで驚き恐れざる魔術の名は、忽ち滿堂に鳴りひゞくべし。この術は已でに早き時代の頃ろより行となわれて、子供を失しなひて悲なしめる母の前に、小供の容を顯らはし、其の近よりて抱かんと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あせる所を、ふと打ち消し、元に返へればまた顯らわして愛情を盛んならしめ、非常の金をむさぼりしものもありと云ふ、漢の武帝の前に死せる李夫人の姿を示めしたりと云ふ。方士も此術をや知りたるならん。

魔術の話なしは、先づこれ迄となしをき、今ま一とつ色の事を說明して、光線の話を終るべし、色は赤にせよ、靑にせよ、黃にせよ、凡べて太陽の光線より出づるものなるは、三角の硝子を日光に晒らして、七色を顯らわすによりて、已でに人との知り給ふ所なるべし。さらば色とは何物か、又た如何にしてかゝる差別は生ずるやと云ふことを一言せんとす、色とは大氣の中にある、イーソルと云ふ、誠に細さきものが、波の如とく振るへつゝ、眼の中の網膜に觸るゝによりて生ずるものにして、さてその差別の生ずる理由は、その振動の數の差あるによりて也。たとへば今まイーソルが一吋の三萬九千分の一の短じかさにて振動するときは、人の眼中に赤色を感ず。一層短じかくなりて、四萬一千分の一となるときは、黃色を感じ。かく段々振動の短じかくなるに隨たがい、種々の色は我等の眼中に映ずるが、黃色の次ぎに短ぢかきは綠色、次ぎは藍色、次ぎは紫となる、太陽の光線は、三角硝子にて、七色に分かち得るが如く、分かちたる七色を、又た板紙にて之を白色に返へすことも出來る也。即ち三角硝子に



第六圖

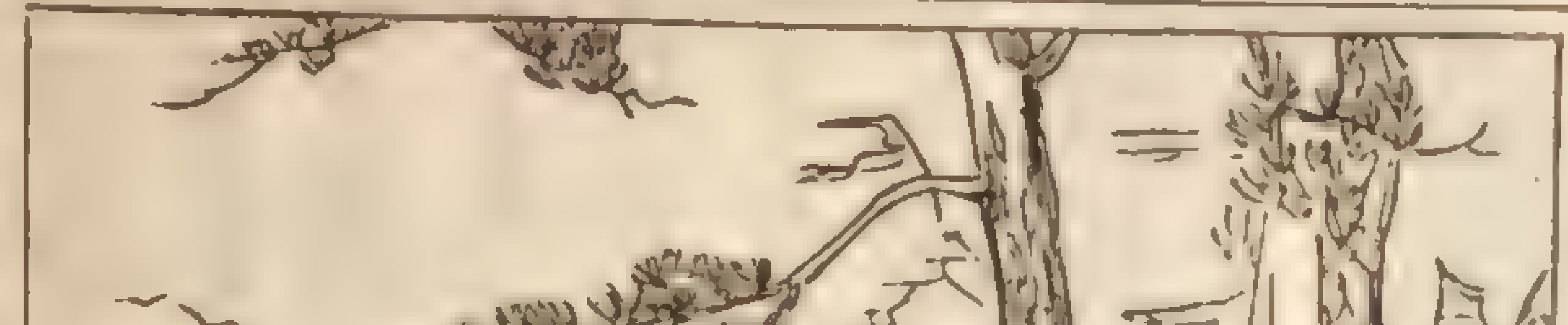
てわかれたる七色の寫つりたる壁に、板紙を當て、だん／＼と三角硝子の方に近かよするに、七色の寫つりたる廣ろさの、だん／＼狭まくなるのみならず、いよ／＼近かよするに随たがひ一とつの色は他の色の上に重さなり、又たその上に他の色は重さなり、面白しと見る間に、遂に元との白色と變じ終るべし。もしその七色の分量、即ち廣海を圖によりて示めさんとせば、第六圖の如とくなるべし。

（終）

松露拾ひ

理科大學　市村塘

今や、春景漸く麗かにして、浩然の氣を養ふには好時節なり、世の母たるもの妄りに其子を強いて閉室し、休日にも繙書讀學せしむるは過まれるの甚しき限りといふべし、寧ろ躰育的、學術的、高尚なる遊戯を勸むるこそ得策なれ、郊外に緑草を踏むも可なり、海邊に砂礫を蹴るも可なり、名所舊蹟を探ぐるも面白ければ、山川樹林を跋渉するも無類なり、殊に風變わりにて趣味ある遊戯は「松露拾ひ」となす、而して五月は正に其採集時なれば、此機を失せず母は子を誘ひ、小籠を提げ熊手を携へ、須らく去て大



磯、藤澤の松風拂ふ海濱に遊べ、若し夫れ松蔭緑草の間より、碧海の滿々たるを望一望すれば、其子の精神をして快活勇大ならしむるのみならず、熊手を以て砂地を浚ふるのとき、圓蕾芳郁勃々露出するに至ては、

誰か日の長きを覺ゆるものあらんや。
松露は其名が示すが如く、砂地の松蔭には必ず繁殖す、

恐らくは日本全國廣しと雖も、之れを産せざるの地、蓋し少なからんや、採集時期到來せば天氣には大抵五六の少年輩が松林を徘徊するを見るべし、彼等は喋々喃々、さも愉快氣なる口振にて。

甲「君、ほんとに澤山あるじやないか、こう、熊手でさらへると、ぼつ〱顏を出す處が面白いや」。

乙「そうして、香ひのいゝとね、僕は君よりも、たんと拾つたよ、そらまた此處にもある」。

丙「あるね、僕は嬉しくつて堪らない、此間叔父さんの宅でも茶碗蒸にはいつて居るのを食べたが、僕は大すきさ」。

丁「そうか、一昨、松露といふが、まさか松の露から出來るでもなかろう、茸にしては笠もなし何だか變じやないかね」。

三人「そうだね、何だろうか……」

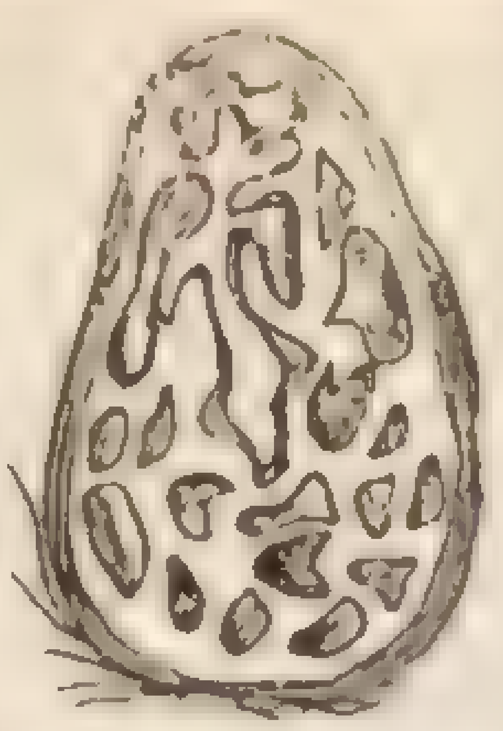
と轉た苦腦に疑團の氷解せざる際に當り、母は其子を伴ひ此一群に分け入り、左の學術談を始むるを良しとす。

母「抑も松露と申すは梅桃櫻と違ひまして、花を開かぬ下等植物の菌類の一種で菌蕈科、隱子菌門の麥蕈族に隷するものであります、漢語では麥蕈と書きますが、羅甸名は Rhizopogon rubescens といふそうです、そんなことはどうでもいゝが、一躰皆さんが食用になる丸いものは何かと云へば、鳥渡高等有花植物梨、林檎、蜜柑の菓實に比敵するところであつて、種子の代わりに胞子といふものを藏めておるといふて差支はない、然らば幹、枝、根、に相當するところがあるかと御尋ねにな

りましよ、それは無論あります、御覧なさい、静かに松露を砂地から引張り擧げると細ひ絲が付いてくるです、これが菌絲で即ち幹、枝、根、の代用をして土壤から營養物を吸收し且つ運搬のとを掌て居ます、併し土中にあつてはこんな短き絲ではなく、四方八方へ漫延して所々に松露の實を結ぶのである、それでお分りになりましよ、松露を採るのは柹の實を斷ざる樣なものですから、翌年又此邊に澤山松露の實が出來るわけであります、尤も松露を採らずに置けば自然に腐りまして、中の胞子が菌絲を出し何時か、更に立派なる松露を結ぶは、倘柹の種子から萌芽して、親と同樣の樹となり柹の實を何時か斷ぎれる樣になると同じとです」。

子「だけれど、お母さん、之を切ても中に胞子とかいふ種子の樣なものはないじやないか、唯、蜂巣見たやうに孔がぼか〳〵あいて居るばつかしだ、可笑いな」。

とは、小刀持ちたる一人の少年が、戯れに、切斷したるより、起りたる疑問なり、母は隙さず、適度の蟲目鏡を取り出し、窺はしめ、棒にて砂地に、上圖の畫を描き示すべし。



母「そりや胞子といふものは肉眼では見えないよ、此蟲目鏡から窺けばぼか〳〵孔があいて居る周緣に細ひ、短ひ、皆長らの同じい、棒が並らんでありましよ、之が子基と云ふもので、其上に二、四、八個の子柄があつて、其端に卵狀のものが着生して居る、胞子といふは、これのとです」。

一人「其胞子が種子ですから、芽出して赤松露をこさへるんですね」。
母「左樣じや……」。
他ノ一人「じや僕等なんだね種子も一處に食ちまうんだひどいんだな」。
皆「はゝゝゝ中々面白ひ話を聞いた」
其他鬼子ッこ、相撲等勝手に鼓躍せしむべしと雖も、夕陽の舂くを忘るべからず、半日の「松露拾ひ」豈に啻浩然の氣を養ふのみならんや。

文藝

嫁形氣

嵯峨のやま人

夫の死は國の爲め
妻の操は家の爲め

三

嫁と姑とのなかよきは
例すくなき世の鏡

日は西山に落ちて、名殘の光は西の半天を薄霧の如くに覆ひながら、上野の森に玉を散し、秋風は颯々として尾花の穗を吹き、梢頭の枯葉を拂て、四下寂寞たる谷中天王寺の境内、墓守の掃除番は、いつ家に歸つた歟影も見えず、誰が忘れたもの歟一ッの鎌、晃々と夕暮の天に映りながら叢に横はり、熊手の空しく石の玉垣に寄せかけられてあるなど、一ッとして寂しき人生の影ならぬはなきに、累々たる墳墓の主は、孰れの人如何なる家の者にて、此には葬られつらう、後には定めて愛する妻や子を殘し、或は別を悲しむ父母兄弟に先立て來たものもあらう、と思へば、死は何人も遁れず、雨、霰、雪や氷とかはれども、落つれば同じ谷川の水、今更の事にはないながら、其で居て哀に思はれるのも人の情でせう歟

折から花賣の老爺に手桶と花とを持せ、右の手に五六歳計の女の子の手を曳き、左に火を燈せる線香を持て悄然として歩み來る一個の婦人があります、年の頃は二十五六でも有ませう歟、おさな兒と其貌のよく似て居るのは、慥に親子で有ませう、おさな子の無邪氣なる風にひき替へ、婦人の何處となく憂を帶びて、深き歎きに沈む如き姿の見ゆるは、近い頃非常の悲しみに出合ひ、今も倘其悲みを悲みつゝある人とは、誰が目にも思はれませう、寂寞たる墓地の夕暮を、悄然として歩み來る其姿、如何程哀に、如何程叉美しく、如何程叉しほらしく、如何程叉やさしく有ませう、梨花一枝春の雨を帶び、涙欄干たる風情などの形容では、其哀にやさしき面影を言現はすには足りません

彼女は往てとある墓の前に立止まりました、是は此頃新に佛を葬むッた所と見えて、地は一段と高まッて居石塔はまだ立てられてないが、其までの代りとして墓標が立てられ、前後左右には幾本となく幾多の樹木が植へられてあります。墓標の文字を見れば、故陸軍少尉某と記してあります。是平壤の戰ひに拔群の戰功を現はして、異域の鬼となッた某で有ます。

老爺は丁寧に墓の掃除を爲し、花筒に水を汲み入れ、花を備へて、さあ御參詣なさいまし、といふて立て見て居るのは、むくつけな野夫の心にも、此婦人の姿を哀に思ッたので有ませう。婦人は一寸會釋して、お前は先へ往ても宜よ、と言ひて老爺をば先へ歸し、其身は樒の一葉を指に摘みて、茶碗の水を墓に濺ぎ、扨墓前に蹲踞して暫らく拜を遂て居たが、やがて立擧りて我子の方を顧み、さあお前もお辭儀をなさいよ、と言へばおさな子もいたいけに、紅葉の樣な手を合せて拜をする。婦人は拜をする我子の姿を見て、夫が世にありて此姿を見たならば、如何程お喜びなさらうにと思ひ、覺えず一雫の涙を落す

Google

おさな兒は孤兒なければ、母の顔を見暮て、ねへ母樣
父樣は此下にお居でなさるのね？
あゝ此下にお居でなさるのだよ、といふも精一杯の返事でせう
おさな兒は母の涙を見て、淡しき心にも悲しくなッたもの歟、ねへ母樣、父樣えらい人だッたのねお國の爲めに戰して死んだのだから。
あゝさうだよ、いくらえらい人でも、死んでしまッては仕方がない、と又一滴の涙を落す、
雅兒も涙を浮べながら恰も母を慰めんとする歟の如く、いけない事をしたねへ、と頭をかしげていふ、
我子のやさしき志に婦人は堪へかねてよゝと泣出す
哀は秋の夕暮です。
五重の塔の頂にはまだ日の光が輝きながら、黄昏は早く墓邊の叢に落ちて、天王寺の森の中、一鳥の啼く聲も最哀で有ます。

母子は墓主に名殘を惜しみて、暫らく徘徊去り兼た樣子て有ッたが、やがて思ひ切ッた歟、再び雅兒の手を率て墓地を出で、其端の花屋に立倚りて暫らく休んで居たが、やがて其處に待せて有ッた車に乘ッて、我家をさして走らせました。
途中雅兒は母に向て、ねへ母樣、お祖母樣に何歟お土產を買て往ませう歟ねへ
母は愛らしさうに我子の貌の上へ我貌を傾けて、よく氣が着ました、買て往きませうよ、と言ひて車を菓子屋の前へとゞめさせ、心斗の土產を求め、更に車を急がする
斯て點燈頃我家に歸れば、姑は觀經の手をやめて、おゝお歸り歟、日がくれかゝッて來た故、案じて居ました。
嫁は始の前へ手をつかへて、母樣、只今歸りました、如何歟日が暮れぬ中と思ひましたが、藤田樣でいろい

Digitized by Google

ろと言て下さるので、つい遲くなッたものですから、
其故おそくなりまして、誠にどうも〳〵姑は機嫌よげに、おうさうでした歟、其は宜かッた、あちらでも誰もお變はりないかね、あゝそれは宜ッた

孫娘も祖母の前に兩手をつかへて、おとなしやかに、
お祖母樣只今、

祖母は其頭をいとほし氣に撫ながら、おほよくお參りに往ッたけの、お父樣は何と歟言ひました歟、靜やよく來たと被仰ッたかへ？と尋ぬる

稚兒は悲し氣に莞爾として、否、と頭をふる、祖母と母とは目と目を見合せて、ほッと溜息をつく、和氣は一家の中に滿渡りながら、又悲しみも一家の中に

嫁は姑の心を喜ばせやうと思ひ附た如く、おゝさう〳〵、お祖母樣にお土產が有ましたッけ、是は靜が氣が着て買て參りましたのでございますよ、靜のお土產でございますよ、と言ひながら風呂敷を解て菓子を取出す。

姑は嬉しさうに莞爾として、おゝ〳〵其は〳〵お靜のお土產では如何樣におひしからう、さあお祖母樣も一ッたべるから、お父樣にも一ッ上てお出と其中の二三ッを取ッて孫に渡せば、彼女は立て佛前へ備へる、其佛壇には、早燈明も點され、線香もあげられて有て、香の煙は室內を籠めて香ッて居ます。

さあお腹も空て居らうに、早く御膳をおたべお湯も湧てあれば、と姑の言はるゝに、嫁も其ではとて、我子に衣服を着替させ、其身も之を改めて膳に向ふ、

斯く食事終りて後、嫁と姑は睦しさうに火鉢を隔て相對し、いろ〳〵の話をして居る中、孫娘は早ねむくなッたもの歟、母親の膝に突伏してねむりかくる故、これ靜さん、おねむになッた歟へ、さあ其ではねんねしようよ、お床を延て、さあと言ふて其を起し、床をのべてねかしてやれば、何のたわいもなく臥て仕舞ふ、」

Google　UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嫁は我子のねむり附たのを見て床を出、脱棄て置た衣服など疊んで居れば、姑は何歟物を思ふ如く、じッと嫁の姿を眺めて居たが、やがて目に涙を浮べて、あゝお前の樣な若い女に、之から後家を立てさせるの歟と思ふ、と私は誠に悲しくて、寧再緣をさせた方が、と此頃では種々迷ふて居ますよといふ

嫁は姑の方をじッと見詰て、何ですねへ母上樣、又其樣事を被仰て、夫のなくなられたのは國の爲で、私が其妻として、何で再緣をする樣な心が有ませう、女の子ではあれ、お靜を立派に育上て、倍度此家を繼せます、母樣も不束の私故、御不自由勝ではございませうが、私も一生懸命になッて稼ぎ、決して母上樣を路頭に迷はせる樣な事はしませぬから、如何ぞ母上樣も其氣で、又其樣事を言て下さらぬと云ふ

姑は涙の目を拂て、あゝお前が左樣言てくれるから、私は如何樣に嬉しからう、又草葉の蔭で彼が如何程喜んで居らう

と嫁姑互に打解て心の中を語り合ひ、互に杖となり柱となりて一家の中を整ふる、誠に目出度き志、誰も斯有たいもので有ます。

訪はぬ墓

敬亭生

十字架なくば、榮冠なし。征清大勝利の後には、思ふに無數の悲劇あらむ。余は其尤も簡單なる一を知れり。

* * *

七年前、余が東肥銀杏城下にあるや、一士人の家に寓せり。家は青檜垣の女が

『年ふれば吾黑髮も白川の
　みつはくむまで老ひにけるかな』

と詠みし白川の邊近き巷路にありき。丁丑兵燹の紀念

なる燒瓦の塀は一方を堺し、桑の生垣は一方を繞り、青葉の頃は緑雲の間より機杼の音咿唖として常に響きぬ。

門を入り折戸を入れば母屋の臺所、臺所の前を過ぐれば小さき離屋あり。余は此離屋に住みぬ。庭は廣からざるも、檐近く桐樹立てり。月白き夜は影を見、雨降る日は香を聞くに妙なり。躑躅あり、小松にからめる小藤あり、芍藥あり、卯の花あり、春晩の眺めなきにあらず。庭と圃を堺せる疎柵の邊には數株の早櫻晩櫻あり。また一樹の碧桃あり。圃には或は緑麥栄へ、或は豌豆茂り、菜蔬繁り、茄子花咲けり。晴れたる日、閑に讀書の窓を開けば、青天一片碧鏡の如く檐にかゝり、鳥雀時に飛んで書窓を覗き、母屋の機の音面白く生垣の外を話しもて通る人語の響却て靜閑の趣を添へたり。余は此處に住んで悠然吾家の思をなしぬ。

家には唯主人夫妻に一人の少女あるのみなりき。家もと丹後以來細川家の舊臣にして、傳家の寶刀と共に武士魂を傳へたり。然も數年來天災人厄頻りに臻り、加ふるに主人性甚だ疎豪、軍人となつては上官と爭ひ官吏となつては叩頭を嫌ひ、終に世に容れられざるより、主人は不平を酒に漏らし、主婦は機を織り衣を縫ひ、一人の下婢を使ひて、其一人娘を愛しつゝ、詫びしく世を渡りぬ。

少女名は政子。余が彼家に寓せし時恰も十二歳なりき。昔し大頭右大將の横に坐はりて日本を掌に動かせし同じ名の人には似もやらで、彼女は眞に蝶の如く無心に、菫菜の如く美しき子なりき。父と母と唯二人の家に生れて、二親の愛を一身に集め、十有二年愛の懷に育ちし彼女は、實に風の如く自然に、花の如くつくろはぬ乙女子なりき。

彼女は小柄にして掌にも載せつ可き少女なりき。こまかき鼻、小さき唇、三日月の眉細小にして、色白

Google UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く、髮黑く、剪り下げたる前髮房やかに額に波うち、牝鹿の眼の如くおとなしきやゝ大なる眼は時に露光を帶びて玉の如く輝やきぬ。彼女は母の着せしむるものを着、母の纏はしむるものを纏ひ、未だ曾て自から粧飾するの心なきなり。彼女は實に半ば春風に微笑する野邊の菫菜花なりき。

彼女は已に尋常小學を終りて、或女學舍に通ひぬ。彼女はナショナルの第二讀本と毎朝戰ひぬ。彼女は大きなる碁盤縞の襯衣をつけ、赤き毛糸の紐をつけし飛白の綿入羽織を着て、廿日鼠の如く膨れつゝ、五色の毛絲編みの嚢に入れし便當を提げつゝ、口々學校に通ひぬ。彼女は女學生なりき。然れども可愛ゆき女學生なりき。

彼女は實に愛せらる可く世に生れし者の如く見へぬ。人はこの常に笑へる少女を見る毎に微笑せずして居る能はざりき。彼女は自から常に笑ひ居ることを自覺せしや否や。恐らくは然らざりしなる可し。父母に愛せられ、凡ての人に愛せられ、心配す可き事とては露程もなき彼女は、其身即ち是れ幸福の化身なりき。幸福は常に笑ふ、故に彼女は常に笑へり。

父母は殆んど彼女に由て生きたり。彼女は父母に孝行せんと欲するにあらずして自づから孝行なりき。彼女が學校より歸り來りて、父の許に急ぎ行き、此書に表紙つけて給はれと云ふ時は、曾て無禮の事を云ひたりとて上官と口論し蹶然辭職せし彼女の父すらも、面倒々々と云ひつゝも直ちに之を諾するを拒む能はざりき。彼女が書を收め便當を仕舞ひて、甲斐々々しく炊事の手傳をなし、機の側に來り立つ時は、彼女の母は如何に嬉しくも悲しくもありつらむ。

彼女はすぐれて學才ある學生にはあらざりき、然も熱心なる學生なりき。日曜にも會堂に行かず遊びに行かず友達の來らぬ時は、嶮峻なる讀本の山路を覺束なく

迴り行く彼女の還常に咿啞の機音に和して聞へぬ。彼女の机は博物館なりき。干物になりたる兎の手は机の前の障子より下がり、煤色目がねは其下に横はり、或は薔薇或は梅の一朶を母の插み分て一輪瓶は其右にあり。様々の石や、筆や、鉛筆や、墨のかけや、箸や、小さき箱や、雄然として窮屈そうに肩相摩して、机上に立てり。彼女此處にありて勉強すれば、母は機の上より時々瞥見し微笑してまた杼もつ手をいそげり。今も見る様なり、彼女が其友達と、庭とも云はず園とも云はず、宛然蝴蝶の如く相追ひ追はれ、其前髪は白き額を掠めて躍り、其顔は淡紅薔薇の花の如く色づきしを。余アレビアン、ナイトの鬼談を語れば、彼女如何に眼を睜りて話に呑まれしよ。冬の夜、彼女の家の爐を圍みて怪談をなせば、彼女如何にしば／＼後を顧みつゝ父と母との間にせり入りしよ。彼女と羽子をつき、手毬をつき、彼女の父母諸共に正月の夜のやゝ白むまで歌骨牌を弄せし事幾回ぞ。「お政さん」と呼べばニコ／＼笑ひつゝ走り來りて椽側に行儀よく手をつかへ、菓子を與ふれば喜び走りて其母に示す。余は心鬱し氣悶ふる時、彼女の嫣然微笑して庭に遊ぶさまを見て、自づから慰められしこと幾回なるを知らざりき。

余は彼女十三の暮春、銀杏城下を辭して東都に來れり。然も彼桑の生垣の内に、機音常に聞ふる家と、其家の花たる彼愛らしき少女の面影は、實に樂しき記憶の一として、未だ曾て余が心頭を去らざりき。

＊　＊　＊　＊

年は七たびめぐりぬ。此年の初春余は事ありてまた銀杏城下に到れり。當時心に謂へらく、余は行きて彼桑の生垣の家を見舞はん、而して彼蝶の如き少女を見んと。年は已に七たびかはりたるも余が心には彼少女は猶前髪剪り下げて常に笑へる乙女とより思はれざりしなり。

Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

或日余は行きて彼家を見舞ひぬ。余は篠の生垣を見るを得ずして、疆もなく限りもなき一面の屋敷を見たり。巷路を誤まりしかと徘徊し見つれども、余は誤らざりき。余は家を見出さんと欲せり。然れども家すらも消へ失せぬ。余は思はず悵然として佇みぬ。

家は失せぬ、人は何處にか行きし。余は折ある每に人に問ひぬ。一日告ぐる者あり、某氏は今城西某處に住す、政子には婿を迎へたり」と。

程なく、余は更に聞きぬ、政子は昨年陸軍中尉某氏の室となれり、而して新婚程なく夫婿は征淸の軍に從ふて南に去りしに、政子は其跡に病て、先月終に世を去りぬ、彼女の父母は落膽して日々衰ふ」と。

余は殆んど信ずる能はざりき。彼の蝶の如く花の如き子、幸福の化身たる彼乙女子が、死し得可しと信ずる能はざりき。彼女は何時までも彼可愛の乙女たる可きものとより思はれざりしなり。

越へて數日、余偶國民新聞を讀べして某軍人の通信を讀み、其姓名により其發信地により、確かに彼の何人たるを認め、思はず爲めに大息せり。吁、彼已に知れる乎、知らざる乎。「可レ憐無定河邊骨、猶是春閨夢裡人」。其にはあらで、家鄕信なき萬里の遠征、戈を枕の夢は猶花の如き新人に向つて飛ばんか。

余は彼女の父母に逢ふて聊か之を慰め、また彼女の記念なる其名をしるせし墓に詣でゝ其美しき魂を吊はんと思ひしも、終に果さゞりき。然れども思ふて彼女の事に到る每に、訪はぬ其墓は彷彿として眼中に湧き、魂爲めに銷せんとするを覺ふるなり。

家政

家事の經濟

賢しこき妻君は、不足なるべき收入の中より、餘まりある支出を爲し得べし。そは外に道あるにあらず、收入と支出の度を計かり、收入以上の支出を爲さゞるが故也。支出と云へば種類も多けれども、如何なる家にても、如何なる日にも、欠ぐべからざるものは、朝夕三度に使用する食用品也。『富貴貧賤にかぎらず一家興敗の鼠穴は食事の卓子の上にあり』と古しへの人の云ひたりしは、誠に穿がち得たる言葉也。故に先づ食事を最も謹しむは、一生を幸ならしむるに最も近かき道とこそ知るべし。さて其の謹しむと云ふ事は、たゞ粗末なる、廉價なる物品をのみ、撰らびしらべて用ゆることを指すにあらず、最も廉價を以て最も健康に益ある、所謂滋養品を求とむるを云ふ也。如何程壓制ずきなる家にても、食事のことは、多く妻君の意に隨ふものにして、其責任も亦た妻君の負擔する所となるが故へに、妻君は朝飯を終ゆれば次ぎの食事は豫らかじめ計りをき、外よりさそへる賣り物の聲によりて不用の品を思はず求とむるが如とき不經濟あるべからず。大家と呼ばるゝ家にては、下女と出入りの商人と一致して、買ひものゝ一割もしくは二割は、上前と稱して下女に利を與ふると、恰も一般の習慣となり、誰れもこれを怪しまざるのみか、雇わるゝ下女等は其の多少を豫らかじめ計かりて奉公する有様となり居れり。風習と思もへば捨てをかるゝ様なるものゝ、もし妻君たるものが物の相場をも知り、臺所近傍の入り用を明きら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かにせば、かゝる弊風は、忽ちに去るを得べく、又た改ためて少こしのさしつかへもなき筈也。もしそれにて妻君に吝嗇とかケチとかの名稱を蒙らしむる下女あらば、その見へざる間に得らるべき利益を公然分かち與たゆるとによりて、その口は噤ぐみ得て餘りあるべし。目にも見へざる程の事が重さなるとは、反て中々に少さきものにあらず。故へにもし妻君が自ら買い物を商人に命じ得る場合ならば、之れに越したる法方はなけれども、もしその出來ざる身分ならば、安全なる貯藏所を妻君の監督し得る所に設き、毎日〳〵下女下男の手を經て、凡ての買ひものを爲さずとも、數日の食用品は、その藏の戸を開らくのみにて出來得る樣、手輕に又た、簡便に爲しをくべし。如何程忠實と思もへる召し使ひのものにても、とかく利己心は全廢し得られざるものなるとは、兼ねて覺悟は定め置かざれば、とんだ鼠の穴は穿がたれて、知らざる間に家財大洪水の原因ともなるに至たるべし。されば妻君は自ら下女頭たることを、忘れずして、凡べての貯藏品、食用品等自ら監督をおこたるべからず。かくて出來上りたる卓子上の食物は、常に幸ひなる感じを以て、妻君の勞を謝しつゝ、一家のものに迎へらるゝが故へに、たとへ充分の美味は含くまずとも、迎ふる人々の心にて味をそへて食するに至るべし。さすれば、卓子の周圍は幸福倶樂部の集會場となりて、笑ひの中に三度の集會は開らかるべし。卓子の周圍に澁面の集つまりて、互がひに物も云ひ合わず、胸中に各々不平を含くみたる時程、云ふに云われざる不幸なる感じはあらじ。之れ元とを正せば妻君一人の心得にあるなり。

人造の哺乳

不幸にして、母親の乳少くなきか、若しくは他の差し

Digitized by Google

つかへありて、生まれ出でたる稚な子に天然の乳を與たゆることを出來ざるときは、最とも經驗ある學說に隨がひて人造の育兒法を爲すの外はあらざるべし。

生母の乳に次ぎてよろしきは、乳母の乳也。最も稚子のためよき乳は、十三分の固形質と八十七分の水分より成り立ちたる乳也。固形質とは、化學上より分拆して見るに、クリーム(即ち脂肪)、鹽分、糖質の中にある炭分、乳皮の中に含くめる動物、纖維等也。牛乳は母の乳に比らぶるに、通常三倍の乳皮を含くめる代わりに其の含める糖分は人乳の半ばに足らず。故に若し牛乳を用ひんとならば、絞りて四五時間も立ちたる牛乳をそのまゝ靜かに移しをかば薄すき水分のみは下におり濃き所は上に集まるべしその浮かみたるクリームの多き所をすくひ取り、之れに、精製の棒砂糖を加わふべし。砂糖の分量は、茶さじに山もり一ぱいの砂糖を牛乳四オンスほどに入るゝ時きは、出來上りたる牛乳は、殆んど母の乳と同なじきものを得べし。

元來母の乳の中には、稚子のために消化し易すき脂肪を含くみ、全くその調合の度合ひ好く出來たるも、牛乳にてはその調合の度合ひに、少しく欠ぐる所あるより、間々稚兒の不消化病を起こす事あり。そは牛乳は稚兒のみならず、大人にても、ドク／＼と飲み下す時は、胃の中にて固まりとなり、中々に解け難きものなり。故へに之れを防ぐために、引き割りたる麥の煮汁を、牛乳に混じて飲ましむる時は。大に胃中の固まりを、解くの力ありて、大便の秘結することあらざるべし。良き牛乳よりは、六合に付き六オンス計りの、精良なる所を、上部よりすくひ取るを得べしと雖ども、悪しきものよりは五オンスを限りとす。生まれ出でゝ間もなき赤ん坊は必ず右の如く爲さゞれば成長に害あれども、三四ヶ月もたちたるものには、牛乳の上部のみを用ちゆる變わりに、四オンスの牛乳には四オンス

Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のクリームを加ゆれば適度となるべし。

ドクトル、エメット氏の説に随がへば、生まれて二ヶ月位の稚子の用ちゆべき牛乳の分量は、二十四時間の間に二十四オンスの食用品を用ゆるを適度とし、その二十四オンスの中をくわしく分解せば、八オンスの牛乳上部、十六オンスの麦湯、小サジ山盛六杯の棒砂糖也。此の加合の分量にて七八ヶ月の頃迄は續づけて差しつかへなし、たゞその飲量をだん／＼增すのみ。左はドクトルハルト氏が、母親の注意のために掲かげ給へる表なるが參考にもなるべければ玆に載す。されどとは西洋人のための表なるが故に、一般の日本人のためには凡て少しづゝ、ひかへ目になしたる方宜しかるべし。

年齢	食事の度數	食事の時間	夜六時方明六時迄に用ゆる度數	一時に飲用すべき分量	以上一日の分量
一週間	十度	二時間毎	二回	一オンス半	十オンス
二週間	十度	二時間毎	二回	一オンス半	十五オンス
四週間	九度	二時間毎	一回	二オンス四分一	二十
六週間	八度	二時半間毎	一回	三オンス	二十四
三ヶ月	七度	三時間毎	一回	四	四
五ヶ月	六度	三時間毎	一回	五半	五二分一
六ヶ月	六度	三時間毎	一回	六	六
九ヶ月	五度	三時間毎	一回	七半	三十七二分一
十二ヶ月	五度	三時間毎	一回	八	四十

一日に用ゆべき分量は、一時に調合して瓶に入れ、固く栓を施こして冷水に濕しをき、記るしの付きたる二三の瓶を別に備へをき、換る／＼ソーダ水に濕たしをき、更る／＼用ゆれば常に清潔なるを得べし。追ひ／＼温たかくなるに隨たがひ、最も恐るべきは牛乳の腐敗也。牛乳の中に砂糖や、クリームを加合する分量は、たとへ適宜を失することあるも、忽ち稚兒の死を招くことはなかるべけれども、腐敗したる牛乳は忽ち彼を死に至らしむるの恐れあれば如何程世話しき時にして、

Google

如何程忠實なる下女に稚兒を預けたる場合にても、牛乳を飲むに用ちゆる一せつの道具は、母手づから掃除して、間違の出來る場合を妨ぐべし。極めて小さき見は、度々乳首と稱する、飲用の道具より、乳の出で過ぐるため、むせて苦しむのみならず、胃中に固たまりを生じて、胃病を起こす事あり。故に少こしく出で過ぐると見しときは、乳首と稱するゴムの飲み口の中に海綿を入るゝか、若しくは、そのゴム管の中頃を結すびて飲ましむべし。之よりその海綿は僅か計りあれば、一時に用ゆるに充分なるが故へに、度々新鮮なるものを取り更へて、決して腐敗の分子を止むべからず。又た飲ましむるときは、生母が天然の乳を飲ましむる如とく、時には小供の左を下たにし、時には右を下たにして、一方のみに向くの癖を避くべし。人生一生の幸不幸は實に哺乳の時分にあるを思もはゞ、一度の牛乳と雖も決して、忽せにすべきにあらず。

春先きの養生

木の芽の吹き出づるを合圖の如とく、毎年〳〵神系病を起こし、夜中眠むられずして晝間ぼんやりとし、見るもの聞くもの怒りの材料となり、下女にも小供にも、當たりかまわず怒かり付くる人あり。こは婦人に多くして其數も中々少なからず。今まその養生法を記るさんに。

或る醫師の説によるに、婦人の間に流行する。不眠病の多ほくは、過食の害をのみ恐それて極端に走しり過ぎ、少食にさへあれば宜しきかと思もひて、分外に少食なるより、胃の働きにぶれ、全身衰弱し、神系のみ強よくなるに由るもの往々にあり。これは誠に氣の毒なる話しなり。かゝる人は元とよりのこと、かく迄ひどからずとも、とかく不眠の人には一時に多食するはあ

Google

かるべければ、極めて消化し易き食物を、小供の食事の如く、一日三四度に分けて食すべし。殊に夕食を早やすまし、夜ふけ迄精神を用ゆべき仕事をなし、そのまゝ休すまんとして眠られず、翌日氣分あしく、遂には不眠の習慣となるは、恐そろしきものなり。かゝる類の婦人は、夕食後三時間許りを隔て、一合計りの牛乳もしくは粥の湯の如き、二三十分にして消化する、滋養物を飲みて後眠りに就かば一は衰弱をふせぐと共に、大に催眠の功あり。こは所謂積極的の養生法にして、夜中飲食すると云ふ一點よりして、一言に批難すべきものにあらず。婦人の學問する時代となりてより、段々に體力は弱とろへ、運動は欠け、神系は強よくなるより、不眠にわずらふ人の數も増々多くなれり。是れ等の流行を妨ぐには、一方には勿論運動を進むるも可なり。沈系のため温浴も最も必要なり。されども滋養物を一時に食せずして、幾分にも分ち用ちゆることを進むるは、時候がら最も忘るべからざる話しなり。

手藝案内

梅花形の置物敷

花落ち鳥去りて世は新緑の候となり人も重衣を去り、縕袢を去り、手袋を去り、襟巻を去る時節となりければ、これより毛糸の編物は追々すたれとなるも、春夏秋冬時厭はず、常に机の上又は床の間に飾る、置物敷と花瓶敷の毛絲製を案内すべし。

先づ置物敷を案内せんか、置物敷は其製作法も、其形も肘突と同様なれども、中に容るべき綿の厚薄の差あるのみ、肘突は其名の如く肘を突くものなれば、綿たつぷりと容るれど、置物敷は薄手にても妨げなく、厚きは却つて體裁に宜しからず、故に置物敷は綿を省く。」

置物敷にも形容はいろ〳〵あれど、梅の花のあみ方を記すべし。

梅の花は五角形を基礎とすべし、則ち先づ連鎖四個をつくりてくりと輪を爲し、其内へ十五の長すきを入れて之を五角に分ては、梅のはなびらの五邊となるべし、其角々にて穴一つごとに二個づゝの長すきを入れ以て一廻り目とす。

二廻目は其角々にて前に二つを入れし中央に、又もや二つを入れて初の廻を一とまはりす。

三廻り目は角と角との中央の所にくさり一つを増し、長をも一つ増し、都合五個の邊にて五つを増す。

四廻り目は角と角と外一つ宛長さを増し、角々にて二つ入れ帽子すきにて止むるなり。

五廻り目は四廻り目に帽子抄にて止めし帽子抄の目にて再び帽子すきを起し、長の上にて又長二つをはじめの目に入れ、次々の目には長二つ後の長の目にて二つ入れ、次々の目には一つを入れ、後の目へ二つ、それより帽子すきの上にて帽子抄にて止む。

六廻り目は帽子抄の上より、くさり一つ長一つを次の目に入れ、又二つ目の目に長二つを入れ、後の一つへは次々に一つ宛入れ、後の長より一と目前に於て長さ二つを入れ、次に一つ入れ帽子すきにて止むるなり。」

これより以下は前の割合にて目を増し、自分の好むまでの大きさに編み行き、これで宜しと思ふ處にて帽子さきにて編み止めを爲すなり。

其の周圍に葉をつくるは出來上りの上にて大に美觀あり、則ち葉をつくるには萌黄か緑色の毛糸を用ゐ帽子抄の上より梅の花のまるく膨れ出でたる中央に鎖目をなし合せ目の鎖の中へ帽子抄にて止め、又々同じ目より四つのくさりを出し、同じ目にて止め都合鎖目若干にて三個の葉を製し、之を各同樣に花の五瓣へ恰好よく附け、中心には黄色の毛糸を用ゐてしめ寄せばか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はゆき指の花形の置物類を得るなり。

筆の序に知らざる人のために帽子抄の大略を記るすべし、其法は糸を抜き出したる針を直に通ずべき目に通して糸を引き出し、其針さきを今度は捨口に通さず、上を越えて糸を引きかけ前に針にかゝり居る二本の糸の中にくゞらして引きぬく、茲に帽子を編むものと見做して其編方を説明せば最初に先づしできをつくりて鎖三つを製し、最初のしとき目にかへして極小の輪をつくり、此輪の中に針を入れて糸を引ぬき、次に上を越えて又糸を引きかけ前にぬきたる糸の中を引ぬくなり、斯の如くすると八回もすれば、其後には右に編みたる圓きものゝ附着せる鎖様の處に針を通し前の如く編み行くことゝ知るべし。

秋六一題

流行の栞

春夢

夏向の裝具

追々夏向の時候となり、野山は青葉に、人は單衣に形をあらたむる氣先さ移りければ、聊か夏向の裝の道具を案内して、購買者の參考に供ふべし。

夏向となれば凡ての流行品は濃厚を厭ひて淡泊を好む、則ち衣服に於て色のこつてりせるものよりは、淡色なるものに人氣多きのみならず、夏の白色、淡色なるは衛生にも利あるなり、裝具にても勿論淡泊なるものが流行の勢力を占むること知り玉へ。

さて櫛より始む、夏は裝具の淡泊なるを喜ぶと共に餘りいろ／＼なものを髪に附着するを厭ふの傾向あり、故に中挿の如きは夏は大に省略する風あれども、櫛のみは春夏秋冬厭なく、又櫛は最も裝具中目に立つものなり、今年流行さも申すべきは、昨年來より殊の外流行界の好評を得し鼈甲製なり、鼈甲は此字の示す如く、貝殻にして、其色鮑貝の内

Google

面に雙鶴たるより、夏向の人氣に投すること夥しく、簡のみに止まらず、凡ての髪具は蝶貝に占領せらるゝの勢あり、昨年流行せしはお初又は政子形に他に何物の添物を加ねざりしが、本年は更に意匠を凝らし、蝶貝に背貝にて種々の模樣を彫り込みたるもの流行の傾向あり　之と同様の好評ある櫛は象牙製(實は鯨牙製)に淡泊なる蒔繪を施したるもの、譬へば水さもゐ、古代模樣、源氏模樣、菊水、芝山、紅葉狩等は重なるものなり、茲に象牙製と稱するものは實際は鯨牙製なれど、其生地と言ひ光澤と言ひ本象牙と異る所なし、價格は一圓以上にて一見熟見眞の象牙としか思はれず、製造も亦進歩したりといふべし、象牙製に擬して「ゴム」製もあり、矢張淡泊なる蒔繪を施し、其意匠は前述鯨牙製と異なるなく、其品位も大差あるにあらねども、何しろ綿より製したる「ゴム」の製工物なれば、自然にそなふる牙色則ち些少の黄色を帶びざるが爲め、眞の象牙と一緒に見れば其眞僞自ら判然たり、併しながら其價格は目下象牙と稱する鯨牙製に下れば此需用も尠きにあらず、白檀製もこれからの流行品にして、上品は人の能く知る通り一種の奇香ある所が價の廉ならざる所なり、昨年より中橋大圓白牡丹にて發賣せし圖に示せる鬢櫛と插櫛と兼用せらるゝは、蒂を本綿にし、其上を四分一にて塗り、あつさりしたる蒔繪を施しあり、其色近來の流行色なる鼠色

を見せ、頗る高尚の趣を存すれば、中等以上の社會の婦人には適するならんか。

根掛も蝶貝製の玉根懸か、白瑪瑙、珊瑚、しすい共に面白し、目下の流行の好位置を占むるは、蝶貝製の管根かけなり、其は人々の嗜好に依れど、七八分を越はず二分を下らざる所なり、素より島田髷には幅廣を用ひ、丸髷には狭きを擇ぶは茲に男子たる余輩が贅言を要せず、價廉にして最も淡泊なるは葛引か奴元結にて間に合はせ置くに如くものなしと雖も、これでは小間物屋さんが泣かねばならず。

中櫛と玉簪の事情は記さず、何故なれば中櫛は禮式用の外夏季は使用するもの稀なり、玉簪は金脚(純金と鍍金を問はず)に珊瑚(眞物と「ゴム」とを問はず)がいぶし銀にしすいかドンヨリした瑪瑙に極り居るものゝ如し、銀の平打は薄手のものに透し彫したるもの夏向に適す。

向挿の花物にては象牙製が蝶貝製に背貝、珊瑚類を取り合せたるもの最も面白し、近來新製のものにて、白百合の莖と花とを象牙に取り、百合の蕾を珊瑚、葉を背貝、蝶貝にてあしらいたるが如きは殊に可憐なり、圖に示せるものは、時節柄の意匠といふべし、純支那風なる金

Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

州、臺灣、澎湖島の新占領地を大日本帝國の版圖としたる、自由に廻轉し得る地球の上に日本の國威を示せる白鷹を置き、地球の下には波濤を打せたる工夫甚だ面白し、是等は直段も左程に上らざるものなれば、必らず盛なる流行を見るべし。

花簪、手柄、掛物、其他の髪具は此次に案内すべし、昨今の花簪には牡丹、菊は時を擇ばざれど藤、つゝぢは少し過ぎて金銀モール製の菖蒲摘製にて聯珠旗の球形、若しくば金鵄勳章なり。

以上は余が世間にて目に觸れ耳に聞きたるものと、重に銀座尾張町松田白牡丹本店及南傳馬町大西白牡丹とに就き實物を點撿して報しまゐらせたるものなり。

流行の蝙蝠傘

これから「ステッキ」廢せられて蝙蝠傘の時めく時代となるべし、何となれば夏は外出には蝙蝠傘なかるべからず、然るに片手にも「ステッキ」を持たせば、兩手に厄介限りなし、故に蝙蝠傘は「ステッキ」の代用をも省するものなれば、「ステッキ」は自然不用の姿なるなり。

安いものなれど近來小兒用蝙蝠傘の流行品は日本大勝利を意味せる聯珠旗又は海軍旗を金巾地に描きしもの行はる。

普通流行するものは柄も變らず、八本骨の「パテン」なり、婦人用には繻子、綾織、絹縷又は「モアル」の布帛地、其以下の品は綾甲斐絹若しくは現今の海老色、藤、紫、第一を占め、形は丸味の輪紐附なり。

男子物は布帛地は以上に述べたるものにして、色は黒に限るが如し、形は「パテン」通常なれど「細卷」と稱して骨細にて卷き收むれば、「ステッキ」の代用に至極好適なれども、其價は廉ならず、綾毛繻又は毛繻子は平民的なるは申すまでもなし。

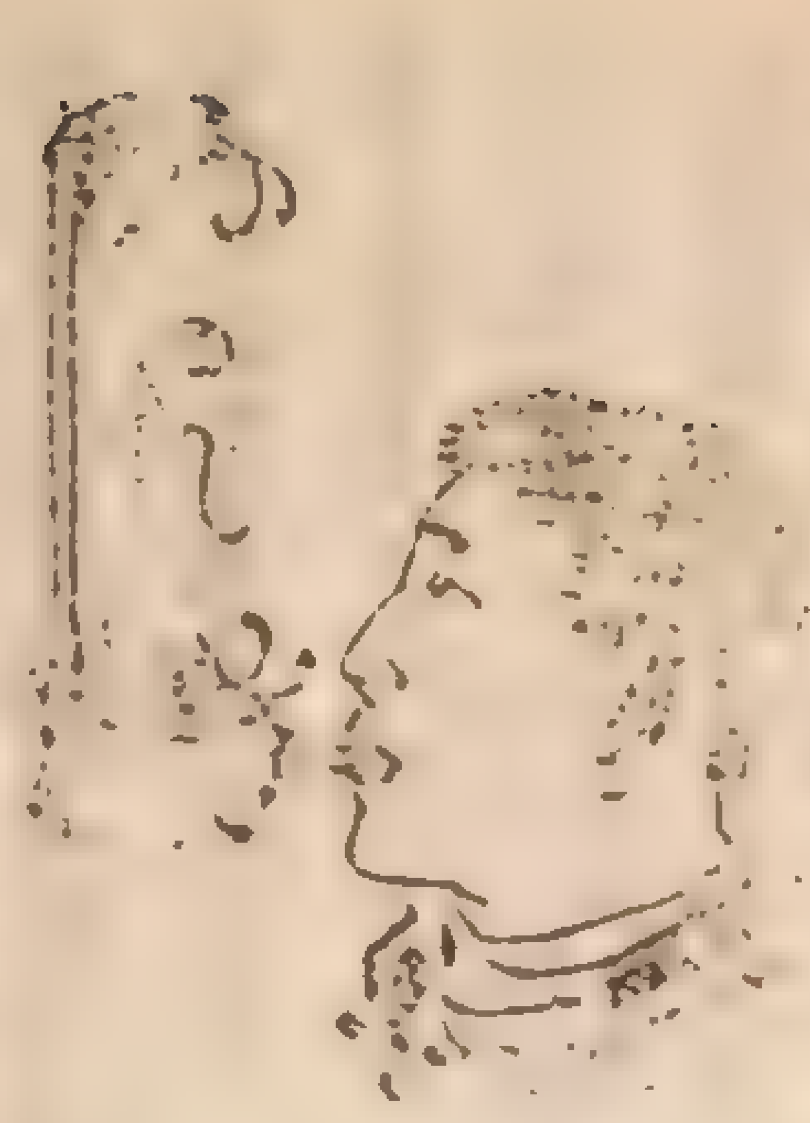
柄はいろ〳〵あれども、普通「人造象牙」と稱する「ゴム」製大に行はれ、形も自由自在に製せられ躰裁美ならずとせず。

玩

日清戰爭は凡ての流行品に影響したるが、殊に小兒の玩具には一方ならざる影響を及ぼしぬ、陸海軍帽子、サーベル、喇叭、劍銃、ピストル、旗、其他種々さま〴〵なる軍事的玩具を增加せり、中にも面白きは近來小石川新諏訪町篠原速發射的銃製造所にて發明事實を得たる

Google

玩具速發銃は、大豆二十粒を装置し、引鐵の作用にて一粒宛送り込み、爆礫の彈力にて勢よく彈き出す工夫面白し、新儀なる玩具は小兒の心に軍事思想を起さしめ、何よりの品なり。



此外に理學的の作用を假れる玩具ますく増加するは喜ぶべし、圖に示せるは凱旋ほまれの吹き上げと稱し、一方の管より息をいるれば、其勢にて豚尾の首くるくると吹きあげらる、これは小兒の肺量を活大ならしめんがために工夫發明したるものなりといふ。

流行の婦人用單衣

春事匆々として過ぎ去り、早や梅實漸く堅き候となりぬ、これより單物の流行を案内せん、さて婦人物を記すること左の如し（但し男子物は次へ譲る）。

先づ高等品は例の如くお召紋織にして其色と柄の流行は年増向（二十歳以上より四十歳前後まで）壁鼠のなまこ、小豆のつなぎ鱗、お召鼠のむじな菊、淡あづきのざぼしつなぎ、革鐵地に白の霞つなぎ、お納戸地にたて縞、うすお納戸に木賊つなぎ、おなんど地にかはり市松、同じ色に斜やなぎ、貴族鼠にあみ目等は重なるものにして、令嬢向には革鐵地に白のくづし矢、小豆ねづみにはす波、うす葉やなぎに網代、お納戸地にならび矢、鼠地にうろこ等は流行の最上位置を占むるものなり、縞お召にては年増向はお納戸に鼠の小棒、黒地にかはり棒、貴ぞく鼠に差子大名、白茶にみぢん、お納戸地に白縞の薩摩、紺地にかはりはけ目、うす鼠に横とほし萬筋等、令嬢向には淡ふぢにかはり薩摩、うす藤にかはり新立、うす紅かけに白縞のさつま、紅かけにかすり大名、うす利久にらん立、肉色にかはり縞、白茶地に牛蒡、紅かけに茶の子持、お納戸に中さつま、紫にやはず等。

次に絹お召にて頗る華美なるものを舉ぐれば、白地に藤と青竹のたき縞、うす鼠にかつを縞、白地にふぢ色の子持、白茶地に淡紫のかはり絣、白地に金茶淺黄の三筋、白地に業平格子、うす淺黄に淺ねづみおなんどの松魚絣、肉色のおなんどの大絣、新あさぎに六亂立、肉色に紫、小豆の並かすり、新あさぎ亂かすり、おなんど淡ねづの市松かすり、鼠紺千歳の變り棒、白紺の大辨慶、うす紫に矢筈、紫に子持の矢かすり、黄金ねづみにかはり矢筈、白地におなんど縞かすり等。

次に本年の新機ともいふべきは、かべ糸織の大縞にして、流行の傾向

あるべき筋合は、かべ鼠の矢かすり、千歳のかはり絣、こひ小豆の松魚じま、濃れづみの子持、鼠地にかはり新立等なり。
山繭織も亦流行の區域に於て好位置を占むるも、此品は單物にしては少々肌に纏綿して着心に佳ならざる所あり、之と同價格の品にして最も實用に適するものは、伊勢崎の銘撰織これなり、今其の派手なるものを擧ぐれば、絣地に絣地にかはり絣多數を占め、他はおなんどと白の市松、おなんどの矢はづ、銀ねづに井桁かすり、うす鼠に變りかすり、おなんどに大十の字、おなんどに立わく絣、うら葉やなぎに三筋、肉色に千歳のかはり絣等、質素なる向は肉色のみぢん、肉色の賽格子、うす鼠のさつま筋、お納戸大名、うすねづにお納戸と利久のおぼろ格子、うす鼠の小紋、うす小豆の棒縞に飛かすり、千歳の萬すぢ等。(伊勢崎銘撰は四圓乃至五圓半なりと聞く)
伊勢崎銘撰より少しく價格の上るものは、夾の結城紬にして、婦人向には大率絣の勢力多きが如し、其流行柄は紺又はお納戸の鹿かすり、雨かすり、井桁かすり、朝鮮かすり、ねこ脚等の
次は紅梅織なり、これは數年前より世評甚た宜しく本年も流行必らず盛なるべし、其流行柄は濃れづみの毛がすり、利久ねづみ六くづし、小格子に飛かすり、紺の雨かすり、十の字かすり、サの字かすり等。(三間前後なりと)
次はさつま絣(二圓より四圓最上は五六圓以上)次は佐々絣(二圓以上)次は久留米かすり(一圓二十錢より二圓)次は地かすり(七十錢より一圓二十錢位)次に單衣と浴衣とに兼用せらるゝものは瀧川縮緬なり、地色は勿論淡泊にして柄は様々あれども、其内の重なるものを擧ぐれば、雨かすり、さつま筋、大名、萬すぢ、金さぼし、亂立、たき縞、松魚縞等(一圓五十錢位)有松、筑前の紺しぼりも好し。
浴衣地の流行には地廻り近在より産する玉川ちゞみ第一位を占め、大和上布(一圓二三十錢)瓦斯糸白じま(同上)等他は染形物にして、地は無論ちゞみと眞岡なるが、本年の流行は昨年と殆ど同じく白地よりも紺地の方勢力ありと知るべし。
上來案内せし外に變りし物を記さば、染地のちりめんにして地味なるは、淡れづみ地、肉色、小豆、おなんど等に割山椒、らん菊、屋根板、大小あられ、角通し、行儀あられ等の小紋にして華美なるは夾の友禪染、其流行形は白地に團十郎格子に蔦がらみ、龍田川、うす鼠に菖蒲に鯉、鼠の紅かけの市松に亂菊の陰陽、藤色地に亂菊、紺地にたてわく、くづし割等、これは小女の單衣として好適せる品なるが、派手なる乙女の長襦袢に用ゆるなり、(價格は前者七圓乃至九圓、後者三丈物一反にて

八圓より十一圓位)。

夏向洋服及直段

左に洋服夏物の流行及直段を報すべし

○フロックコート　紺地薄一木綾羅紗、ズボンは縦縞のセル地尤も行はれ代價は十八圓より廿四五圓迄。

○モンニング　今年は紺地セールにズボンは縞セル地行はれ代價は十四圓より十九圓位迄。

○背廣　薄地の縞スコッチ三つ揃にて十四圓十六圓位上着チヨッキは紺綾セール地にてズボンは縞セール地十三圓より十六圓まで。

○オヴアコート　鼠茶無地セール上等十三圓位より七圓五十錢位まで（本年はグこトン地は品不足の爲に高價にてオヴアコート五圓より八九圓位にて餘り行はれず）

○單衣　セル地鼠、茶、藍等多く行はれお召縮緬、結城紬、萬筋、薩摩絣に擬したる新柄多く到着し代價は六圓より六圓五十錢位フラ子ル地も鼠、茶等の萬筋、小格子、微塵、薩摩絣等の新柄多く代價は三圓八九十錢より四圓四五十錢位。

○リン子ルチヨッキ貝釦取引し縞二圓五十錢より白は二圓前後に際して本年は銀貨下落の爲服地高く又軍服仕立の爲に職工の賃銀も騰貴し昨年の今頃よりは二割方高かし今年の花見頃に洋服紳士を見ること少かりし故洋服は流行せざるが如く思ふ者あるも實は官途に在る人多くは各地に出張して不在なる爲に少なき譯にて其の出張には大抵洋服を新調したる爲洋服商は非常に多忙なりし由。

夏衣及其相場

某呉服店より夏衣及其相場を報し來る錄して讀者の參考に供せんと欲す。

諸織物は日清戰爭の爲め生産地も仕込み商人も賣行を氣遣ひて控退に仕入れ品のなきも相場は西京物、野州、上州、八王子其他とも昨年の今日に比して一割高なるが日清戰爭の響きと即今の外交問題の響きにて今一寸腰折れの姿にして絹、木綿とも稍や引立たず不振の市況も見ゆれど生産家商人共品少なを氣構へ少しく賣行きの兆さへ顯はるゝに於ては品切れとなるは必然にして必らず二三割より四五割も上騰するとあらんとの氣構にて一寸買控への姿あり扨て目下夏物にして賣行きあるものは瓦斯双子中形同セル地双子、平御召柄等なり絹物上等は諸糸竪織、涼風織等。

木綿縮み道分け染小紋と棒縞の染分け一反に付壹圓六拾錢同眞岡木綿同染壹圓三拾錢。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

木綿御召ヤマトの高砂染手綱隈取形壹圓三拾錢、同縫り矢筈形、高砂染壹圓三拾錢。

瓦斯糸風通染南部即ち褒毛萬筋、裏角鍋形壹圓四拾錢。

瓦斯糸セル織裏大名縞又此手形壹圓二拾錢

瓦斯平御召柄壹圓二拾錢。

眞岡木綿藤色地鶴羽根形、壹圓二拾五錢。

瓦斯糸絹織中形矢筈、飛白七寶菊換樣の各種一反貳圓拾錢。

瓦斯糸絹織縞もの一反壹圓五拾錢、木綿縮み凱旋丈夫壹圓五拾錢、瓦斯糸絹織、古代有職形、山水形、印盡し等何れも一反貳圓五拾錢(尤も婦人向き)。

上流向き絹物單物は涼風織にて片羽萬筋一反拾圓前後

諸縮織萬筋、大名縞、鎧縞等の羽織地八圓五拾錢着尺地拾圓前後染物友染縮緬古代有職形、山水、印盡等にして一反拾三圓より染物友染歌舞伎十十八番狂言摸樣頗るの美事出來一反拾三圓此等の染物染は洗濯するも變色の憂なしと云ふ。

同上布矢筈形其他價拾圓本年の新物にして貴婦人社會に流行故上布同錦八圓五拾錢。

夏物問多袋織男帶一面十字紋一面黑色價七圓同利休地手綱木賊一面

は御納戸無地縫全七圓日本錦色(淺淡黃)支那錦壓の新形何れも一反壹圓五拾錢。

以上の品々は本年の新形新物にして博覽會へも出品し續々注文ありと又此外單物地井新形女帶地の相場を聞くに西京御召珍稿一反壹圓より拾四圓足利改良御召拾五圓結城紬一反六圓より六圓五拾錢同絣飛白木綿中縞にあるもの五十通りは一反八圓八十通は九圓五拾錢百通り十二圓百八十通りは最上十六圓なり伊勢崎銘仙セル柄一反四圓五拾錢より五圓飛白縞五圓より六圓並物二圓五拾錢より三圓位なり新流行夏物繻珍織片側女帶地濃き色紫菊形七圓、同アゲキ色鳳凰形七圓小豆色女丸帶鍛爽龍形三拾圓小豆色地古代菊、雲形四拾七圓等なり。

日用品物價(五月五日)

◎白米小賣(一圓に付) 一等白米七升七合◎二等白米八升三等白米八升三合◎四等白米八升七合◎五等白米九升一合

◎雜穀 ◎南京大豆一斗七升五合◎同青大豆一斗七升五合◎同白小豆一斗四升五合◎地廻中小豆一斗五升◎八戸大豆一斗六升八合◎和製薄色小豆一斗四升◎日無白さ一斗二升◎木石大豆一斗六升七合◎南部大豆一斗七升◎越後大豆一斗五升五合◎金剛黑豆二斗

◎鹽 ◎赤穗三俵六分五厘◎大縣井に八塚三俵七分五厘◎木齋五俵二分五厘◎新齋六俵三分

雜錄

Google

余が友の愛らしき忘想（二）

鐵斧生

友は火ばしもて頻りに灰を弄びつゝ、猶も語るを聽けば、

わが家に書齋の設けなきこそ口惜けれ、質素乍らも書を讀み、文かき、物思ふ靜けき部室一つ殊更らに設けたきものならずや。

少しく議論がましけれど、吾國これ迄での家の造りかたに付ては、われ甚だ申分のあるなり。

無益なる間のみ多くして、間毎に實用あるとなし。飯食ふ部屋を家族團欒の樂しき、可笑しき、面白ろき場處と定めて、其の他は主人の間、細君の間、子供の間と、粗末乍らも別々に致し度き者ならずや。

其れは贅澤なり、と言ふものあれど然らず。

此時友の口調何となく演說めき、今まで灰をかきまぜ居たる火箸をもて火鉢のふちを輕くたゝきはじめぬ。演壇を拳もて打つ心なるべし。

否、決して贅澤ならず。一間四疊半もしくは六疊にして可なり。彼の八疊或は十疊の奧の客坐敷ほど馬鹿らしきものなし、これこそ贅澤なり。

主人一間をもち、細君一間をもち、小供たち亦た一間を持たば、各好む處につれて其の間を飾りもすべし、自分の部屋を自分で飾るといふ事も亦た家庭の樂の一つなり。

况んや各其の部屋にある時、規律整しく其の有樣を爲し得るに於てをや。われ思ふ、人間は獨り坐するの時間少なくとも一晝夜のうち三四時はなかる可からずと。主人もとより然り、細君然り、子供は殊に然り、已に稍長じて讀書の年に達したる小供最も此の必要あり。

奧坐敷は化物も出そふなるに引かへ、勝手の一間には

Google

一家族雜然と群がりて終日たゞがや〳〵と暮すこと、皆に家庭娯樂の上より言ふて宜しからざるのみに非ず精神上に甚だ害あり。

一言以て之れを評すれば、吾國在來の家屋は、來客の日を豫想して其の時の便利に造り、家庭其者の高尚なる目的のために造りたるに非ず。之れ根本の弊習なり。

一家の娯樂、子弟の教育、各自日々の職務、各自一生の修養などの、便宜を第一と顧みて家屋を造る事は今後大に注意せざる可からずとわれは思ふ。

友の演說は此にて止み、火箸再び灰に歸り、彼れの心再び郷里の空に飛びぬ。其のかゞやきたる眼の光、急に睫毛の背にかくれしを余は傍より見て之れを知るなり。

友は更らに自家の妄想を描きつゝ曰く、

故にわれは決して書齋なき、今の吾が家にては滿足せじ。わが父は三年工夫して今の家を建てられし由母は語り給ひしも、吾れ之をきゝ思はず吹き出したり。吾れ國に歸りなば、直ちに今の家を解きて、其の材木もて自から思ふ如くに改造せんと思ふなり。われは材木の善惡など少しも頓着する處にあらず、天井板が神代杉であらうと、松の生板であらうと、いやしくも實用に差つかへなくば、少しも頓着せざるなり。

先づ我が部屋は六疊ならば十分なり。われ一人此の六疊一間あらば事足りなん。こゝにて書を讀み、こゝにて事務をとり、こゝに眠り、こゝに起き、此部屋をわが好みに從て裝飾なさん。天井は成る可く高くし、南に向ひて前に花園を設け度く思ふ。

其の次に細君の部屋、其の次ぎに小供達の部屋、皆な南に面して花園を控ゆべし。但し各自其の好むがまに〳〵庭の花草樹木など手入れする事となさん。

而して此等の部室と並べて食堂を置くべし。食堂と言

Google

へば、何となく仰山に聞こゆれども、所謂ゆる勝手の間の事なり。此の間は少しく大なるを要す。こゝにて一家族集り食事をなし、談話をなし、遊喜すべし、客に饗應するも此の室に於てす。實に便利の事ならずや。

斯くて此等の部室は皆な一すじの椽がわを以て之れを連ぬるなり。

此の如くする時は外見少しく殺風景の樣なれど、之れを風流に造らんと思はゞ多少の工夫を用ゆる迄でなり。兎に角にわが理想の家屋はこれなり。國に歸らば必ず實行せんと思ふ。

君、三年の後ち心ず吾が家を訪ひ給へ。此の理想の家を建てゝ待たんに。

＊　＊　＊　＊　＊

友は其夜十一時頃まで語りて歸りぬ。

われ思ふに世間此の友と等しき妄想を描きつゝあるもの譏し少なからざるべし。此の如き妄想ほど樂しき妄想はあらず、罪なき妄想はあらず。

加賀の千代

《口繪の繪解き》

加賀の千代嘗て句ありき、

　鍋炭のゆくへ耻かし燕子花

卷首掲ぐる所は此句を圖したるもの也。

千代は加賀松任の商賈の女、父を福枡屋幸右衛門といひ、成長の後本吉町即ち今の美川町なる或方へ嫁ぎ、二十五歳の時、夫死してより生家に歸りて生涯寡居せり、元祿十四年生れ、安永四年七十五にて沒せしよし、嘗て福井市に在りたる宮代多美氏が本社に書を寄せたることとありき。

氏は自ら松任に到りて其跡を訪ひしに、今も松任町の

中央にさゝやかなる小間物見世を出して福増屋ありきといひぬ。

時事一斑

東京市の膨脹

東都昨年末現在の人口百八十五万七千九百十五人ありき。之を前年に比すれば二十八萬九千四百三十七人の増加也。僅に一歳にして二十八萬人の増加を見るもの、非常なる膨脹力あるにあらざれば焉ぞ能く此くの如くあらんや。

明治廿八年の京都

四月一日を以て博覧會京都に開かれてより、京都は各種の集會の中心となれり。さなきだに京都附近の地は、自然の風姿と歴史の記臆とによりて春にもなれど嵐山の花を觀、東山の朝霞を眺んとて集ひ來るもの少からぬに、博覧會さへ開かれたるとなれば、誰かは數日の遊覧を吝むべき、博覧會聯合府縣の人を始めとし、全國より集りしもの其數少なからず。此機に乘じて各種の集會がとに會せられたるも宜なりと謂ふべし。今其一二を擧ぐれば、全國蠶絲業大會の如き、農事大會の如き、農學士會の如き、全國實業各團體聯合會の如き、全國取引所聯合大會の如き、全國燐寸業大會の如き、大日本商工會の如き、日本貿易協會大會の如き、五二會大會の如き、或は佛教大會の如き、或は福音會の集りの如き、皆京都に會せられたるものあらざるなし。

之に加ふるに東本願寺の遷佛式あり。遷都千百年の紀念祭あり。殊に新に大本營の所在地となるに及び、軍國の事亦京都を中心とするに至れり。明治二十八年の京都は大繁昌の京都なる哉。

Google

無烟無聲火藥

長野縣人櫻井平吉氏發明の無烟無聲火藥は現に品川沖第三番砲臺にて試驗中なるが、無煙の點は頗る好結果を得、無聲の點は全く音聲なきにはあらざるも、音聲頗る微にして成績よろしきよし也。但し火力微弱なるが爲め目下此點につき猶研究中なりと云ふ。

佛敎は如何なる有樣を以て存するか

佛敎は如何なる有樣を以て存するか、明治廿五年末の調査は斯くいへり、

宗派	寺院	住職	僧侶
天台宗	四七九八	二八一三	五九三九
眞言宗	一二七七七	七〇九五	九五七〇
淨土宗	八三〇二	六二五四	一〇八二五
臨濟宗	六一四〇	四〇九八	八四二二
曹洞宗	一四〇七二	一二二五三	二一七五〇
黃檗宗	六〇四	三五二	六二二
眞宗	一九一四九	一六八〇一	四一〇二八
日蓮宗	五〇五三	三五三八	八〇八四
時宗	五二〇	三六五	八六六
融通念佛宗	三五八	一九五	四五二
法相宗	四五	一九	三七
華嚴宗	二一	一一	二〇
合計	七一八三九	五二七九四	一〇七六一五

東洋貿易港の航海日數

は或人の調査によれば下の如し。

自神戸至釜山	三日半、	自橫濱至香港	七日
自釜山至仁川	二日半、	自香港至廣東	六時間
自仁川至芝罘	二日、	自香港至福州	二日半
自芝罘至天津	一日餘、	自福州至上海	二日半
自天津至北京	水路三―四日、	自上海至寧波	一晝夜
自天津至牛莊	二日半、	自上海歸橫濱	七日間
自牛莊至芝罘	二日、	自芝罘歸神戸	九日

衛生の時代

戰爭の後には病ありとの諺にもれず、日淸戰爭斯く收まらんとして虎列拉病の流行始まる。心せよ、世は將に衛生の時代とならんとするにあらずや。

勤勞の時代

行樂の時代漸く去て勤勞の時代來らんとす。花謝し樹翠に、茶の世來り、養蠶の世來る。雲雀の如くに開きたる野に歌ひつゝ、茶を摘む人もあらん桑を採る人もあらん。麥圃に菜園に立働く人もあらん。働け、働け、國家の榮へは働ける國民の榮へる野に生長せざるはあらず。

Google　UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社交一斑

家庭叢書第九卷

一冊十錢　郵税二錢

例により新聞評を掲ぐ

●家庭叢書第九卷として出づ、社交上一般の要旨を解く例によりて簡明平易殊に篇末禮式一斑を添へしは用意懇到(讀賣新聞)

●本書は家庭叢書の第九卷として發刊せられたるものなり記事頗る平易にして理會し易く常識ある婦人に取りて實に好侶伴といふべし(國會)

●家庭叢書の一なり洒落なる小冊子にして一讀社交の新智識を得るに足るべし(都)

●社交の方法を巨細に説き、附錄として禮式一斑を添へたり、若き書生などには、相當の才學ありながら社交の方法を知らざる爲め、人に疎んせられて志を得ざる者往々にして之れあり、此等の人は此書を一讀すべし、(東京經濟雜誌)

家庭理財

家庭叢書號外

定價十錢　郵税二錢

此書の便利有益にして所論の着實、材料豐富なるは茲に多言を要せず、其目錄の大要は、序論、第一章貯蓄(一)郵便貯金(二)貯蓄銀行(三)普通銀行(四)保險—生命保險—火災保險、第二章投資(一)公債(二)株式と合資(三)投機、雜説(一)負債(二)家計(三)歲計豫算(四)帳簿(五)利息(六)損傷紙幣の交換、結論等なり、要は何人の家庭にても容易に理財の道を知らしめ且つ實行せしむるに在り

本書に對する批評

●貯金、保險、公債、株式等に就き、一家經濟の整理法を最も實際的に論記したるもの也、家計の事に疎き書生上りの紳士などは此の書を一讀せば益を得ること多かるべし、(經濟雜誌)

●各種の貯蓄、保險、公債其他家計等の事を面白く丁寧に記述せるは流石民友諸君の技倆なり其才木牛流馬に及ぶとや評すべき(日本)

●一家の經濟之を投ずるも之を貯ふるも其道を以てすればよし、所謂一家金錢の取扱法を巧みにするは實に家庭和樂の基なり家庭理財一篇此邊の消息を說く實に丁寧親切(讀賣)

○家庭叢書第一卷	家庭の和樂	定價十錢	郵税二錢
○家庭叢書第二卷	夏の家庭	定價十錢	郵税二錢
○家庭叢書第三卷	玩具と遊戲	定價十錢	郵税二錢
○家庭叢書第四卷	家庭教育	定價十錢	郵税二錢
○家庭叢書第五卷	小兒養育	定價十錢	郵税二錢
○家庭叢書第六卷	家庭衛生	定價十錢	郵税二錢
○家庭叢書第七卷	家政整理	定價十錢	郵税二錢
○家庭叢書第八卷	簡易料理	定價十錢	郵税二錢

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google

無烟無聲火藥

長野縣人櫻井平吉氏發明の無烟無聲火藥は現に品川沖第三舊砲臺にて試驗中なるが、無煙の點は頗る好結果を得、無聲の點は全く音聲なきにはあらざるも、音聲頗る微にして成績よろしきよし也。但し火力微弱なるが爲め目下此點につき猶研究中なりと云ふ。

佛教は如何なる有樣を以て存するか

佛教は如何なる有樣を以て存するか、明治廿五年末の調査は斯くいへり、

宗派	寺院	住職	僧侶
天台宗	四七九八	二八一三	五九三九
眞言宗	一二七七七	七〇九五	九五七〇
淨土宗	八三〇二	六二五四	一〇八二五
臨濟宗	六一四〇	四〇九八	八四二二
曹洞宗	一四〇七二	一一二五三	二一七五〇
黄檗宗	六〇四	三五二	六二二
眞宗	一九一四九	一六八〇一	四一〇二八
日蓮宗	五〇五三	三五三八	八〇八四
時宗	五二〇	三六五	八六六
融通念佛宗	三五八	一九五	四五二
法相宗	四五	一九	三七
華嚴宗	二一	一一	二〇
合計	七一八三九	五二七九四	一〇七六一五

東洋貿易港の航海日數

は或人の調査によれば下の如し。

自神戶至釜山　三日半、　自橫濱至香港　七日
自釜山至仁川　二日半、　自香港至廣東　六時間
自仁川至芝罘　二日、　自香港至福州　二日半
自芝罘至天津　一日餘、　自福州至上海　二日半
自天津至北京水路　三—四日、　自上海至寧波　一晝夜
自天津至牛莊　二日半、　自上海歸橫濱　七日間
自牛莊至芝罘　二日、　自芝罘歸神戶　九日

衛生の時代

戰爭の後には病ありとの諺にもれず、日淸戰爭斯く收まらんとして虎列拉病の流行始まる。心せよ、世は將に衛生の時代とならんとするにあらずや。

勤勞の時代

行樂の時代漸く去て勤勞の時代來らんとす。花謝し樹翠に、茶の世來り、養蠶の世來る。雲雀の如くに開きたる野に歌ひつゝ、茶を摘む人もあらん桑を採る人もあらん。麥圃に菜園に立働く人もあらん。働け、働け、國家の榮へは働ける國民の集へる野に生長せざるはあらず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭叢書第九卷

社交一斑

一冊十錢
郵稅二錢

例により新聞評を掲ぐ

●家庭叢書第九卷として出づ、社交上一般の要旨を解く例によりて簡明平易殊に篇末禮式一斑を添へしは用意懇到(讀賣新聞)

●本書は家庭叢書の第九卷として發刊せられたるものなり記事頗る平易にして理會し易く常識ある婦人に取りて實に好侶伴といふべし(國會)

●家庭叢書の一なり洒落なる小冊子にして一讀社交の新智識を得るに足るべし(都)

社交の方法を巨細に說き、附錄として禮式一斑を添へたり、若き書生などには、相當の才學ありながら社交の方法を知らざる爲め、人に疎んせられて志を得ざる者往々にして之れあり、此等の人は此書を一讀すべし、(東京經濟雜誌)

家庭叢書號外

家庭理財

定價十錢
郵稅二錢

此書の便利有益にして所論の着實、材料豐富なるは玆に多言を要せず、其目錄の大要は、序論、第一章貯蓄(一)郵便貯金(二)貯蓄銀行(三)普通銀行(四)保險―生命保險―火災保險、第二章投資(一)公債(二)株式と合資(三)投機、雜說(一)負債(二)家計(三)歲計豫算(四)帳簿(五)利息(六)損傷紙幣の交換、結論等なり、要は何人の家庭にても容易に理財の道を知らしめ且つ實行せしむるに在り

本書に對する批評

●貯金、保險、公債、株式等に就き、一家經濟の整理法を最も實際的に論記したるもの也、家計の事に疎き書生上りの紳士などは此の書を一讀せば益を得ること多かるべし、(經濟雜誌)

●各種の貯蓄、保險、公債其他家計等の事を面白く丁寧に記述せるは流石民友諸君の技倆なり其才木牛流馬に及ぶとや評すべき(日本)

●一家の經濟之を投ずるも之を貯ふるも其道を以てすればよし、所謂一家金錢の取扱法を巧みにするは實に家庭和樂の基なり家庭理財一篇此邊の消息を說く實に丁寧親切(讀賣)

○家庭叢書第一卷　家庭の和樂　定價十錢　郵稅二錢

○家庭叢書第二卷　夏の家庭　定價十錢　郵稅二錢

○家庭叢書第三卷　玩具と遊戲　定價十錢　郵稅二錢

○家庭叢書第四卷　家庭教育　定價十錢　郵稅二錢

○家庭叢書第五卷　小兒養育　定價十錢　郵稅二錢

○家庭叢書第六卷　家庭衛生　定價十錢　郵稅二錢

○家庭叢書第七卷　家政整理　定價十錢　郵稅二錢

○家庭叢書第八卷　簡易料理　定價十錢　郵稅二錢

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA